幼児の教育　昭和62年10月　第86巻第10号（毎月1回10日発行）昭和23年4月17日第三種郵便物認可　昭和62年　第10号

家庭・保育所・幼稚園

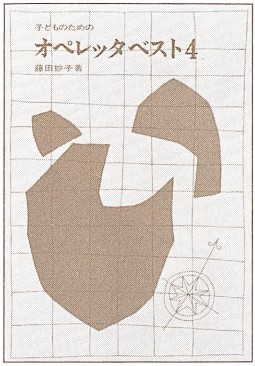
幼児の教育

1987 10

第86巻　第10号　日本幼稚園協会

オペレッタ ベスト4

藤田妙子著　　B５判・188頁・定価2,000円



飛翔する多彩なファンタジー、軽妙で思わずふきだしたくなる内容、最も強調したいこと、それは、作品が全員参加を前提につくられていて、出演する子どもの誰もが主役であり、力いっぱい表現できること。
プロットと歌と身体表現、それに伴奏がみごとにとけあって、子どもの欲求にぴったりであること。詩と音楽、踊りと劇、絵と工作がすべて含まれており、子どもの生活経験を豊かにする表現教育の題材として最適であること。この生命のかよった魅力的なオペレッタを子どもたちとともに楽しんでください。

幼児指導の基礎 ●イラスト資料

全国幼稚園教育研究協議会編著　B5判・144頁・定価1,600円

幼稚園において幼児を指導する際に、教師は、人としての基礎、基本を身につけるようにすることが大切です。そのためには、教師自身が、指導の意味を明確にし、自信をもって、的確かつ効果的に指導できるようにすることが必要でしょう。本書は、その内容をイラストでわかりやすく説明しています。

- 指導上のちょっとしたことで、不安な事柄について正しい確かな方法や手だてが、わかりやすく説明してあります。
- 新人保育者の参考書としても役立ちます。
- 幼児教育を学ぶ学生、実習生のテキストとしても最適です。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第八十六巻　　第十号

幼児の教育　目次

——第八十六巻　十月号——

ある日　—行為の中にある真実を考える—……津守　真…（4）

SF的読み解き　子どもという風景

第三十回　「ちょっと」の構造……堀内　守…（10）

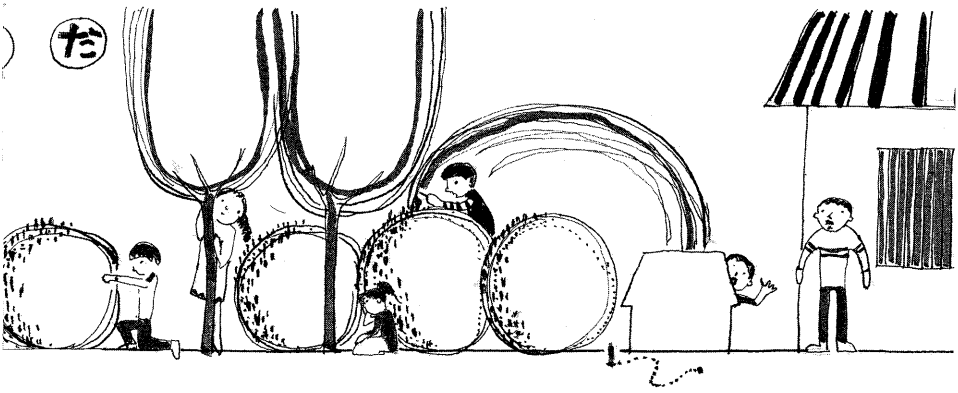
ふくろうのつぶやき

—多くではなく、深く—……真壁　伍郎…（20）

子どもの会話（その二）……無藤　隆…（30）

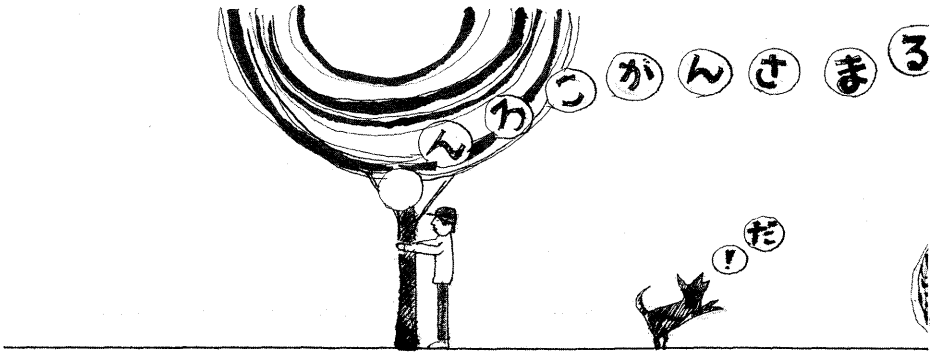
© 1987

日本幼稚園協会



子どもたちのこと……大橋利恵子…（36）
娘と自転車で考える……上村　英明…（41）
若いお母さんたちへ
姉妹のかかわり……はるにれの会　榎田二三子…（46）
一歳六ヶ月児健診経過観察における遊びグループ指導の展開
上垣内伸子・市川奈緒子…（54）
古屋喜美代・山崎　聡子

カット・福田　理恵
編集部・小澤　誉子
土屋真美子



ある日
―行為の中にある真実を考える―

津守　真

一、

朝、保育の現場に出てゆく前のひととき、私は静かな時を持ちたいと思っている。一日、私はヨハネ福音書の最初の一節、「はじめにことばあり……」を読んだ。前田護郎訳のその個処の注に、「ナザレのイエスこそ神からつかわされた真のことば――その来臨によって神と人とを、また、人と人とを対話させて結ぶもの――とヨハネはいう」と記されていた。ことばは、話される言語を指すだけでなく、ひとつの生涯の全体を、とくに行為の底にある人間の真実を指しているのではないかと思う。

このようなことを朝のひととき考えて保育の現場に出た。そうすると、たちどころに、私を必要とする子どもに出会い、それに応答して一日は過ぎる。子どもは毎日を真剣に生

きているので、それに応答する行為はどこかで人間の真実に結ばれている。その一日は雑多な行為の集積でなく、それらを貫いている真実の秩序がある。保育の具体的な時の移り行きは、滑らかな流れではなく、磨擦と抵抗の厚みのある瞬間の連続である。

二、

この日、朝、いちばんに、前号までに記してきたK男が門から入ってきた。いそがしくなりそうに思えたので、他の子どもたちがくる前に、K男としっかりとつき合いたいと思って過した。そのうちにK男は私を保育室の中に押しこんで庭に出てゆき、もどってこなかった。自分ですることをしっかりと見つけるようになるのに、これまでの長い経過があるが、この一日は、すでにそのような歩みを踏み出したこの子どもとの応答である。

室内には、登校途中の乳母車の中で眠ってしまったA子がふとんの上にいるだけである。一歳になる前に脳腫瘍の手術をし、昨年から歩きはじめるようになったこの子どもは、お姫さまのように皆に可愛がられる一方、ときによって、赤ちゃんを羨む子どもたちに関心をもたれるので、眠っているときにも大人は目を離せない。

窓から外を見ると、H子がひとりでたらいの中で水遊びをしていたので、保育室の戸をしめ、出入口に気を配りながら、しばらくH子の水とつき合った。ひととき沈黙のやりとりの後、H子は校医さんのおいていってくれたプラスチック製の注射器の水鉄砲で水を上手にとばすようになる。上に向って水をとばし、「お空」と何度もいう。小柄な身体の割

に体重のあるこの子どもは、意外に、空と水のイメージに生きているのではないかと思う。ブランコにのるときも、たくさんこいで欲しがる。トランポリンも思うようにとべないのだが、手をとってたくさんとぶようにしてもらいたがる。私も気持の重い日に、ふと見上げた空が特別の意味をもつことがある。可愛いがられて育ったこの子どもも、養護学校に通う程の障害を負っていることを思うと、私共には分らない身体的不快感があるかもしれないし、社会的なひけ目を感ずることもあるだろう。

今朝も、元気にとびはねていたひとりの子どもが、突然床に崩折れて発作を起した。手を握っていると、発作の波が高まり、そしておさまってゆくのがわかる。じきに唇の色も元通り紅色になるのだが、私共には分らない不快感があるだろう。身体的にも社会的にも重さをもった子どもたちである。それだけ軽さへの憧憬も、人知れず抱いているのではなかろうか。空に向ける眼、流れゆく水への関心。

こうしている間にも、H子のわきを、何人もの子どもやおとなが通り、近寄り、過ぎ去る。H子はそのたびに、注射器の水鉄砲を人に向ける。個人と内部のイメージと共に、他人に対するイメージと関心がある。だれの中にも両方があり、両方を表現できる人は健全なのだろうと思う。

H子の水とつきあっている間に、何人もの子どもが保育室に出入し、私はそのたびに、子どもによっては大急ぎで部屋にとんでゆく。私は眠っているA子のことを気にしてそこにいくのだが、実際には何も起らない。部屋に入ってゆく子どもは室内を歩きまわった

り、トランポリンをとんでは出てゆく。

三、

K男が保育室に入っていったので私はあとからおくれて部屋にいった。

K男はA子のふとんに一緒に横になり、A子の顔をのぞきこんで笑い、A子の手を優しくとって動かしている。こういう光景を見られるのは保育者の幸いである。いままでだったら、他の子どもが近寄っただけでK男はその場を立ち去ったのに、きょうはA子に親しみを寄せている。ふたりの様子が可愛らしいので、私は「いまにK男くんと妹のM子ちゃんと、それからA子ちゃんと手をつないで、ナショナルスーパーにいってアイスクリームたべるんだね」とお話しをすると、K男はケラケラ笑って、A子の手にさわる。そして、もっとその話をしてくれと私を促す。私は同じような話を何度もくり返し、K男は、「A子ちゃんとM子ちゃんと」というところで笑ってA子の顔をのぞきこむ。そんな日がいつくるのだろうかと思いながら、いまは五、六歩しか歩けないA子のそのときの姿を、ふと思い浮かべてしまう。

四、

まもなくA子は目を覚まし、お弁当にする。いま、A子は食物を机の上にいっぱいひろげ、それを両手で口にいれてたべるので、それをすることができるように、まわりをとと

のえるのにいそがしい。身体と感覚が大きな位置を占めているA子の生活にとっては、食べるたのしみは大きいと思う。まだ、両手で食べ物をつかんで自分の口にいれることによって、食べているのは自分であるという自我の感覚がたしかめられていると思うので、あたりを汚すけれども、このことはさせてやりたい。

食事が終るとすぐにA子ははって玩具棚にゆき、籠をひきずりおろしてあそびはじめる。他の子どもが床にこぼした水をふいたり、あそんでいるA子の食事の洋服を着がえさせ、おむつをかえ、周囲の子どもたちの遊びの相手をしながら、A子に新しい服をきせなどしているうちに、時間はバタバタとすぎて帰りの時間になってしまう。その中のひとつひとつの行為には、考えると面白いことがいくつもあるのだが、そのときは印象にとどめるだけで、どの子どもたちも満足してあそべるように、いそがしく立ちはたらくことで精一杯である。まわりの子どもたちがみんな心ゆくまで何かをしているので、私にはそれが快い。

迎えにきた母親たちとことばをかわす。

五、

これはある日の保育の実際である。

具体的な内容は毎日違う。日によってはまるで違う。同じところで保育をしていても、人によって体験は異る。まして違う幼稚園、学校で仕事をしていれば、具体的な生活の内

容はそれぞれ違うだろう。だが、子どもと生活を共にする保育の生活には、どれにも共通なことがあるのではないかと思う。それは何なのだろうか。

保育の生活は本を読む生活とは異る。自分の興味を追って調べものをする学者の生活ではない。自分が計画したことを実行に移してゆく生活でもない。

それは、自分とは違う人間である子どもの要求に応答する生活である。よく見て理解し、判断し、行為する生活である。身体を動かす生活である。想像力をはたらかす生活である。これらのことは、どのような場であろうと、保育する人に共通のことである。

更にまた、それはいろいろの子どもや大人に気を配る生活である。ほとんどとりとめのないことをしながら、その結果、大人も子どもも自己を実現するのを助ける。その中で生きる私にとっても、その一日は人生の貴重なひとこまである。

子どもと一緒に過して後、あれこれと考える生活であることも、保育者に共通である。考えの結論はえられないままに次の日をむかえる。そしてまた具体的な子どもとの生活の中に投げこまれる。毎日の保育の実際は具体的な行為から成り立っているので雑然としているように見えるが、その底に人間の真実がある。それを明瞭にしてゆくところに、保育の学問の重要な課題があるのではないかと思う。

（愛育養護学校）

SF的読み解き
子どもという風景

第三十回　「ちょっと」の構造

堀内　守

ふしぎな間合い

どこにでもそういう人はいる。ご本人は口ぐせになっているから気がついていない。けれども、まわりの人にはわかる。

たとえば「ちょっと」という言い方だ。

「ねえ、ちょっと」「ちょっとそこまで」「ちょっとお待ちください」「ちょっとお目にかかりたいのですが……」などには日常の場面でよくお目にかかる。「ちょっと」はまことに便利なことばである。

少し変形すると、語り手の人柄や地位や趣味まで表現できそうだ。

「ねえ、ちょいと」「ちょい待ち」

などが好例である。

もちろん、子どももよく使う。のみならず、その場合の「ちょっと」ははるかに複錯している。

ちょっとやそっとでは解けそうにもない。そう思われるくらい。でも、「まてよ」と考えてみるのもよいだろう。ちょいとばかり、ちょっくら考えてみよう。

芝居にちょっと出る役のことを「ちょい役」などという。ちょっと物悲しく、愛らしく、ちょっと滑稽な表現だが、捨てがたい。だって、「ちょい役」がなければ主役も脇役もありはしないのだから。また、ちょっと救いがあるのは、だれでも「ちょい役」から始まったという事実だ。

「ちょっと」は、「一寸」と書いた。「なるほど」と感心するくらいユーモアのある表現である。（と筆者は信じている。）

「一寸」は、表記としても、尺度としても、表舞台からひっ込んでしまった。出て来て、見栄（みえ）を切ってもよいと思うが、今日では「一寸」は、「三センチ三ミリ（メートル）」と置き換えられてしまったから、イナセなタンカを切ることはむずかしい。これでは「一寸」のためにちょっとさみしい気がする。

――と、いうようなときの「ちょっと」は、ふしぎなことに、ことばどおりの「ちょっと」ではない。まさに、レトリックの妙ともいうべきで、「ちょっと」どころか、無念さを秘めた「ちょっと」になっている。

それを見抜くこともできる。見抜けないこともある。この辺の微妙さは、「ちょっと」ことばで表現することは無理かもしれない。

鳥渡

「一寸」と書いただけではない。「鳥渡」とも書いた。鳥が渡るというイミやイメージの方も面白いが、これはもともと当て字であろう。「ちょっと」である。

ちょっと違う。それを書き直し、「鳥渡違う」としてみたら、詩的なイメージが喚起されるかもしれない。いや、駄洒落かもしれないから、断定はちょっと控えておく。

要は、「一寸」にひっかかることよりも、「ちょっと」には微妙な表現があって、「あのボールはちょっと打てない」というように、「ちょっと……ない」と続く場合があり、この表現はちょっと見のがせないふしぎな世界へ人を誘うことに注意しておきたい。

ちょっとふしぎなのは、「ちょっと」が呼びかけになるということである。これは、先に挙げた「ちょいと」でも、「ねえ、ちょっと」でも同じである。「もしもし……」というよりも、「すみませんが……」というよりも、若干、少なからず人間くさく、よそ行きの場でもなく、さりとて親し過ぎる場でもなく、ちょっと微妙な関係にある人同士が使うことばである。

俗語（どうか「ポピュラー」とか、「ポップ」ぐらいに受けとめて下さい）によく出てくる呼びかけがある。また、家の中でも、子どもの遊びの世界でも。あ、忘れてはいけない。叱る場合にも。非難する場合にも。

「ねえ、ちょっと、これ片づけなさい」

「ちょっと、これ、どういうつもり」

「ちょっと貸して」

「ちょっと、どいて」

まったく「鳥渡」のイメージのごとく、つぎつぎと湧いてきます。

この場合の「ちょっと」は、まず音声学上ちょっと見のがせない。

「ちょっと」「ちょいちょい」「ちょっくら」「ちょくちょく」「ちょこちょこ」のように「ちょ」の音である行為の場を切り拓く。いきなりストレートに言うよりも、「ちょっと」を付すことによって、その場の気配（けはい）を方向づけてしまう。スローモーション風に表現すれば、「いまから何かを言うぞ」という呼び出しでもあるし、「言うこと」の内容を和らげる効果ももっている。

「ちょっと貸して」の「ちょっと」は、どこまで広がる「ちょっと」なのか、はなはだ微妙である。お金を借りるときなど、大のおとなの人が「ちょっと」を何度も連発し、言いにくそうに言い出す。それは、「ちょっと」ということばで連想されるほど少額ではないし、「ちょっと」ということばで応じうるほど貸し方も金があり余っているわけではない——のを和らげる。

「ちょっと」は気紛れである。

副詞としてはいろいろな場面に顔をのぞかせる。面白いのは文章のなかにはあまり登場しないということだ。

ことに大論文などには登場しない。日常会話、CM、童謡、歌謡が主舞台である。

「ちょっとうれしい日曜日」「ちょっぴり悲しい冬休み」「ちょっと不安なお留守番」「ちょいと一杯」。

ちょっと離脱

日常世界のなかからちょっと離脱するには「ちょっと」の効果は絶大である。

「ちょっと勉強」し、「ちょっと遊び」に出かけ、「ちょっと」と人を待たせ、「ちょっとそこまで」出かけ、「ちょっと」立寄り、「ちょっと」買い物をし、「ちょっと」おしゃべりをし――「ちょっと」は生活世界をちょっとしたドラマに仕立てあげる。

日常生活とてスミからスミまで繰り返しのワンパターンなんてことはないのだ。「ちょっと」の介入によって、ちょっとしたドラマになり、ストーリーをもつようになる。

だから日記や生活記録も存在する。

ちょっとした一工夫で、子どもの作品がちょっとしたものになり、思わぬ世界をかいま見せてくれたりする。

では、ちょいと実験――

白昼夢を見るとか、空想に耽(ふけ)るとか、憧憬(あこが)れるとか、願望をもつとか、もっと現代風にヴィジョンをつくるとか――これらは一般に心を浮遊させることであると見られている。

だが、はたしてそれだけだろうか。

だれしも、「ゲンジッ」の枠をきめることはできない。これは「空想」だ、これは「夢想」だ、これは「憧憬」だ、といって、どんどん削っていけば、その先に何か究極の手ごたえある「ゲンジッ」が待っているか。そう思うことが空想なのである。そんな意味の「ゲンジッ」なんてありはしない。「ゲンジッ」なるものは、人間の「空想」や「夢想」や「憧憬」や「期待」によって織りあげられ、立体的になっているのだ。

教科書に書かれている「ゲンジッ」なるものはあまりにも通俗的で合理的過ぎる。それは、まるで「空想」や

「夢」のことごとくが単なる化粧品のようなもの、余分なものと見ているようなのだ。

でも、生きたゲンジツを見てみよう。そこではどんな場面にも「夢想」があったり、「空想」があったりする。私たちは、ある時にはちょっとした淑女や紳士になったつもりでいるし、場面によっては然るべき行動の台本に従って自演している。

子どもにとっては、冒険譚やおとぎ話、アニメのヒーローやヒロインたちと同化することは朝飯前のこと、お茶の子サイサイのことである。そのとき、子どもたちは、あたかもまったく違った別人になったかのごとくふるまうのだ。

ちょっと変容

空想は単なる代案的世界への逃避ではない。きまりきった生活の輪郭をぼかし、きまりきったやり方のなかに新味をつくり出し、親しい友人のようになる。心のうちなる劇場は、たった一本の棒切れを「刀」にしたり、「指揮棒」にしたりする。そのたびに、当の子どもは、みずからを「武士」に変容させ、そのようにふるまってみせたり、「指揮者」になったつもりで、そのように自演してみせるのである。目には見えないが、趣味もちょっとした聖なる離脱である。庭、遊戯室、地下室や屋根裏といった場所も、日常的な、きまりきった世界とは別の世界が存在することを知らせてくれる。

運、偶然、運命、リスクなどを含みもつゲームも、ちょっと変容するにはもってこいの契機をなす。時間つぶし、しごと、帰宅なども、ちょっとした「冒険」の要素を含んでいる。

「ちょっと」変容するために、化粧をし、衣服を変え、スタイルを変え、イメージを変える。そのことは、他者がイマジネーション――イメージをつくり出す想像力――をもっていると予想しないではありえないことである。

要するに、ちょっと変容するには幾通りものやり方があるわけだ。ゲームをする人は、競技場へ行く。休暇を

楽しむ人びとはどこかへ出かける。また、美術館や博物館を渡り歩くのも、変容を求めてのことである。いや、物静かに坐って、頭のなかでいろいろな事象を動かしてみることだって、ちょっとした変容なのである。

こわい「ちょっと」

「ちょっと来なさい」とか、「ちょっと来い」は、同じ「ちょっと」でも、いきなり別世界を呼び出す。叱られるとき。説教されるとき。何か悪い予感がする「ちょっと」である。

隠しておいた悪戯のあとが見つかってしまった。「ちょっと来い」は、そういうときに現われる。やりっ放しのことが見つかり、どうして中途で放り出したのだとキツモンされるのも「ちょっと来なさい」ではじまる。「これは何だ」「どうしてこうなっているのだ」ということばが飛んでくる。

だから、この種の「ちょっと」は実にケンノンである。

反対に、ややていねいに「ちょっと来てよ」は、だいたい何か頼まれるとき。「ちょっとおつかいに行ってきて」とか、「ちょっと手伝ってくれ」と続く。これもありふれた「ちょっと」である。

どうしてこんなに「ちょっと」は頻用されるのだろう。ちょっと変ではないか。

電話が鳴る。「ちょっと出てみて、いま手が離せないから」。こういう場合の「ちょっと」は、のっぴきならぬ状況での身代りのようなものだから、事は単純ではないはずなのだが、それでも「ちょっと」である。

もっとも、会社などでは上司から「ちょっと君」と呼ばれることはやたらに多い。何ということか。この種の「ちょっと」は、本当に「ちょっと」のこともあれば、重大命令を伝えるきっかけであることさえあるという。

「ちょっと」の文脈

さて、こんなに変幻自在な「ちょっと」の風景をこの辺でちょっと整理してみようではないか。すると、意外なことに、「ちょっと」は、ちょっとやそっとでは整理できないような様相を呈するのだ。

いや、そもそも「ちょっとやそっと」となるに及び、「ちょっと」は、重みを転じ、まことに深刻なイミを発信しはじめる。

この「ちょっとやそっと」は、かならずその先に否定語を伴っていて、その否定を強めるはたらきをもっている。「ちょっとやそっとでは動かない」などのように。

また「一寸見」などの名詞もできている。これで「ちょっとみ」とよませる。ことばどおり、「ちょっと見」ること、「ちょっと見」たところを意味する。

「ちょっと見るだけだよ」「ちょっと見せて」「ちょっと見ただけなのに」というように広がりは意外に広大だ。

「ちょっと見たら、もう見えなくなった」「ちょっとしか見られなかった」「ちょっと（ちいと）も見られない」。

「ちょいと出ました」「ちょい待ち草のやるせなさ」

「ちょっと知っている」等の微妙なニュアンスは、物語の世界から別世界への誘惑を伴なっている。

呼びかけが結構多いのだ。「ちょっと待て」「ちょっと、君」などが典型である。これを応用した番組名もあったっけ。軽みがあり、ユーモアがあり、お人好しであるような主人公。「花子さんちょっと」「お母さん、ちょっと」「中村君、ちょいと」等々。

「ちょっと」が試みにを意味する場合がある。物は試しだ、ちょっとやってみようというわけである。「ちょっとやってみる」がその代表である。となると、このちょっとは、子どもの世界ではやたらに多いことも納得されよう。すべてが「ちょっとやってみる」で成り立っているといってもよい。

文字通りなのが「わずか」や「少し」を意味する場合である。それなのに「ちょっと」が「かなり」を意味する場合もあるから事は複雑になってくる。例としては「ちょっとした店だ」とか「ちょっと金がある」などだろう。この「ちょっと」(「わずか」「少し」)をヒネるまでに世の中を見てこなくてはならないから、ふつうの子どもには使えない。大変なレトリックを要するからだ。

もう少し、態度決定を伴なう「ちょっと」もある。これも否定の語を伴っていて、「少々のことでは」の意味あいが強い。

「ちょっとできないな」。相当やっても、やりとげる自信がない、というのである。この「ちょっと」と「ちょっとやそっと」とは構造が似ている。いや、ほとんど重なっているといってもよいくらいである。だから、この意味の「ちょっと」を使いこなすには、あるていど時をかけなければならない。

「ちょっと」の音調

意味の文脈から離れよう。そして、「ちょっと」の生きた脈絡をウォッチングしてみるのである。

なるほど驚くべき多様さが見られる。

「ちょっと、早く並びなさい」「もうちょっと左へ寄って」「この計画じゃ、ちょっと無理かもしれない」「じ

や、私がちょっと走っていってくる」「ねえ、ちょっと見て、この絵、ちょっとしたものじゃない？」「うーん、ちょっとマネできない」「ちょいとしたものね」などという会話は、ちょっとした集まりで平然と交わされている。

「もうちょっと」も結構多い。「もうちょっと頑張れば、ちょっとした成績になれるのだが」「ちょっと心配になってきた」「もうちょっとのしんぼうだよ」「ちょっとちょっとっていうけれど、そのちょっとにはもう聞き飽きた」などと。

「ちょっとだけお時間をいただきたい」なんて電話がかかってきたら、一見ひかえ目な口調のなかに、「ちょっとやそっと」では動かないというくらいのしたたかさなどが加わっていることもあって閉口する。おとなだけではなく、子どもの世界でもこういう「ちょっと」は日常的に見られ、「ちょっと」はどこへやら、延々と続くことになりがちである。

つまり、この「ちょっと」は、当面の手がかりをうるための「ちょっと」だから、語調はていねいだし、ひかえ目であるし、恐れ入っているような響きもある。

利害を超えた「ちょっと」はなかなかいいものである。

「ちょっと失礼」というときの「ちょっと」は本当に微妙である。「ちょっとごめんなさい」なども、本当に「ちょっと」したことのようでいて、それがあるから仰々しさが弱まっていく。何なら、他人の前を「失礼」と言って通るときと、「ちょっと失礼」と言って通るときの、自分の身体の緊張度を想像してごらんになるとよろしい。「ちょっと」が入っただけで、身の動きはぐっと変わるはずである。そして気が楽になる。

こんなことはあたりまえだから、というので、「ちょっと」が切り拓く世界はあっさりと忘れられているのがふつうであろう。だが子どもの行動に視線を合わせて見ていると、「ちょっと」は、余分な作法を超えて、みごとなやりとりを始動させているのが見えてくる。

「ちょっと」は、そこにおいては調子がよいときはぐ

んぐん伸びたり、ぐんぐん広がったりする。のみならず、ひとつの「ちょっと」が別の「ちょっと」を呼び出して、絡み合い、増幅し合い、溢れ出す力となることもある。「ちょっと」がちょっとのうちに無我夢中の世界に転じてしまい、きっかけが「ちょっと」にすぎなかったなどということは忘れ去られてしまうからである。

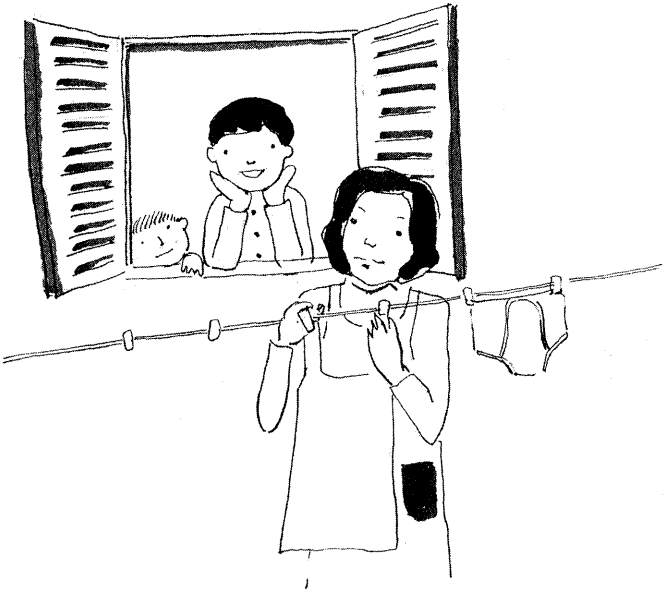
以上のことは、ちょっと、見のがせないことではなかろうか。ちょっとやそっとではできあがってはこないこととというべきではないだろうか。「ちょっと」ならぬ「そっと」のぞいて見る価値があるように思える。

おとなだって似たようなもので、「ちょっとお茶でも」というきっかけから延々と談話を楽しむことだってよくあるし、「ちょっとごあいさつを」が重々しい作法に通じたりしていて驚かされることだってあるはずだ。

こんなに大変なことを短時間で片づけてくれたのに、その人は「いや、ちょっと」と軽く応ずるだけなどということもある。「いやあ、ちょっとした失敗をしましてね」が、かなりのことであったりしたり。

ちょっとから入って、あちこちめぐってくると、ちょっとの世界はちょっとしたもので、ちょっとやそっとではつかみ切れぬ世界であるらしいが、ちょっと探険してみたくなる。

（名古屋大学）



ふくろうのつぶやき

―多くではなく、深く―

真壁伍郎

小さな家庭文庫とはいっても、二〇年もたてば、本の数もしだいに多くなります。もちろん公共図書館の代わりをしようなどとは当初から思っていませんでした。本がいっぱいある、本好きなおじさん、おばさんの家で、子どもたちが本のことであれこれおしゃべりでき、それが楽しければもう結構。家庭文庫のよさは、こうした気軽さにあるとわたしたちは信じています。

ですから蔵書も、最初から、あらゆる分野の本をそろ

えようなどとは考えず、わたしたちの気にいった本、子どもたちに読ませたいと思うような本を随時買ってきました。それでも、その数がかれこれもう三千冊近いものになってしまいました。

決して良い本ばかりがそろっているわけではありません。今から考えれば、とても子どもたちによい本だなどと薦められないようなものもあります。たくさんの蔵書は、それ自体決してほめたことではありません。よい本を求めて試行錯誤してきただけのことです。迷いもなく、よい本が探し出せ、それとだけつきあっていけたらどんなにかいいことでしょう。

有名な話があります。ドイツのある有名な教授、彼は山ほどもある本でかこまれた研究室に助手や学生たちを導き入れて、こういったそうです。

「みなさん、わたしたちのこれからの演習の目的は、いかにしてこれらたくさんの本を読まずに学問をするかを明らかにすることです」

本物の学者にしていえるすばらしい言葉です。きっとこの人も、実際はとても多くを読んできたにちがいありません。それだからこそ、学生たちにこのような適切な指導ができたのだと思います。大学者ならぬわたしたちが、よい本を求めて迷うのは当然です。でも、迷いながらも、いかに読まずにすますかを究極的にはたずね求めたいものです。

毎週土曜日、文庫の本棚の前で、子どもたちは、この迷いの最初の訓練をしているようです。

「どれにしようかなぁ。これはもう読んでしまったし、こっちの本はあんまり面白そうじゃないし……」

子どもたちの迷いは、なかなか大きいです。こちらが手助けをすればよいのでしょうが、そこはちょっとの辛抱。自分で探してもらいたいのです。たくさんある本の中から「自分」で選んで、それが面白かったら、それは子どもにとって、大きな業績になるでしょう。選ぶことができるとは、将来、事によったら、自分の進むべき人生の選択にも通じるかもしれませんし、また、一人の伴侶と生涯つきあう決断にも通じかねません。

面白い本を見つけるのに苦労している子がいるかと思えば、あんまり借りていきたい本がいっぱいあって、それを並べて、どれにしようかと迷っている子もいます。見ていて、わたしは心のなかでいいます。「そうなんだ、選ぶってことは、捨ててゆくことなんだよ」

小学校や中学校の図書館で、最近どうしても本を選べない子がいるそうです。一時間中、図書館の中をうろうろしているといいます。先生かだれかが、これにしなさいといえば、それで収るのでしょうが、自分ではなかなかその決断ができない。自分の好みが分らない。なにをどう選んでよいか分らない。子どもたちも大変な状況に陥ったものです。本がありすぎるし、なにもかも親まかせ、先生まかせになっているからでしょう。

選ぶことをめぐって、あれこれ考えていたある日、ふくろうがなにやら呪文のような言葉をつぶやいていました。ノン・ムルタ・セド・ムルトゥム（non multa, sed multum）。どうも、ラテン語のようです。ノン・ムルタ、多くではなく、セド・ムルトゥム、深く、（not many, but much）。なかなか意味のある言葉です。

子どもたちにたくさんの本を読ませようと、学校では、読んだ本の冊数を競わせているところが多いと聞きます。その影響なのでしょう、文庫に来る子どもたちにも同じような現象が見られます。文庫の貸出カードには、一枚に約四〇冊の本の名前が書けるようになっていますが、これに借りる本の名を書きながら、

「ぼく、もう八枚目だよ」

などといっている子がいます。

カードのどこにも、そんな記録はしていないのに、自分が読んだ（借りた？）本の冊数をはっきり覚えています。おどろいてしまいます。きっとこの子の親も、冊数のことをいうのでしょう。学校の図書館が、今ではそうしたコンクールの場になっているのだと聞きます。恐ろしいことです。

一方、そうした子どもとは、まったく対照的な子どもがいます。一回の貸出は二冊までだというのに、いつも

一冊しか借りていきません。それも、とても大切そうに借りていきます。「楽しみ」を借りていくといった感じです。その子には、それで充分なのでしょう。その一冊をどんなふうに楽しんでいるのかな、と想像するだけでも嬉しくなってしまいます。こうした子どもの家では、たいてい親も読書好きであることが多いようです。親もあまり冊数のことはいっていないようです。冊数よりも、楽しさのほうが大切で、きっと本の内容について親子で話し合うことがあるのでしょう。お母さんたちが、時々わたしたちに、本をめぐっての家庭での親子のやりとりの様子を伝えてくれます。幸せな子どもたちだなと思います。

「文庫（の時間）も楽しいけど、帰り道もまた楽しいんだなぁ！」

いつも穏やかな表情をしている五年生のかおりさんが、ある時、つぶやくようにいっていました。

「え、どうして帰り道が楽しいの」

彼女の答えはこうです。文庫に来るときは、今日はどんなお話や本を読んでもらえるかと楽しみにして来る。そして、文庫の時は、それはそれで楽しい。でも、帰り道、友だちと今日聞いた話や、読んでもらった本のことを、あれこれ話して帰るのが、また、とっても楽しいのだそうです。

すごいなぁと思いました。この子は三重の楽しみを味わっているのです。ふと、あるけちな男の話を思いだしました。

ある、とてもけちな男がいました。彼は食べるのも、飲むのも、みんなけちけちでやっている。ですから、ごはんを食べるときも、おかずは梅ぼし一つだけ。この一つの梅ぼしを、彼はまず、にらんで一杯、そして、食べて一杯、最後に種にして一杯。このようにして、この男、梅ぼし一つで、三杯のごはんをおいしく食べていたといいます。

子どもたちのお話の楽しみようは、まったくその通りです。口につばをいっぱいためて、おいしいものを待

つ、あの「先だつ喜び」を子どもたちは知っています。残念ながら、わたしたち大人はいつの間にかこれを忘れ去ってしまいました。指おり数えて待つほどの期待を、もう持てなくなってしまったのです。

さらに、「後なる楽しみ」。これもわたしたちは子どもに学ばなければなりません。余韻や感動を胸に、家に帰り、眠りにつく。きっと感動が心に刻まれるためには、それ相当の暖めの時間が必要なのでしょう。

文庫の帰り、仲のよい友だちと、ぽつりぽつりと語り合いながら、家に帰るかおりさんの姿を想像して、わたしは心が熱くなってしまいました。

先を急ぎ、あたふたとあれこれ読みあさって、いかにも本を読みましたという顔をしているのがわたしたち大人です。とくに学者といわれている人たちが、どれほど本当に本を読んでいるのか。かおりさんの言葉に深く反省させられました。

子どもたちの楽しみようは、本来こうだったのでしょう。一つの物語は、一つ世界。いっしんにお話に耳を傾けている子どもたちを目のまえにすると、「満たされた時」というものが、どんなものかがよく分ります。

冊数に惑わされなければ、じっくり楽しめるものを、と、子どもたちの本を選ぶ姿を見ながら考えます。たくさん本を読めば、それだけ賢くなり、人生も豊かになる。親や教師のそうした思いが、あの子たちの背後にあるように思えてなりません。しかし、それをいったいだれが確かめたことがあるのでしょうか。知識を追い求めた、または追い求めている大人たちは、それが自分たちの人生を豊かにしていると実感しているのでしょうか。

目は見ることに飽きることがなく、
耳は聞くことに満足することがない。
先にあったことは、また後にもある。
先になされた事は、また後にもなされる。
日の下には、新しいものはない。
「見よ、これは新しいものだ」と
言われるものがあるか、

それはわれわれの前にあった世々に、
すでにあったものである。
（伝道の書）

旧約の詩人が語るこうした言葉が、異様なほど真実味をもって追ってきます。この詩人は、さらに「多くの書を作れば際限がない。多く学べばからだが疲れる」とさえいいます。

なにも深い考えがあったわけではありませんが、かなりの年月、わたしは、テレビと新聞のない生活をしたことがあります。どれくらい、時代遅れになるかのか試してみようと思ったのです。もちろん家族も一緒です。

その結果、時代遅れになったかどうかは分りません。でも、この期間は、わたしたちにとって、まさに「恵まれた時」だったようです。ゆっくり家族で話し合えましたし、わたしたちを訪ねてくる友人、知人との話が、新鮮でどんなに面白かったか。文庫の子どもたちも、自分たちが見聞きしたことを、このなにも知らないおじさんに、一生懸命に話してくれました。まさに、語る喜び、聞く喜びを双方で味わっていました。

そんな経験をした後で、はっと気づかされることがありました。わたしたちの会話が（そして、研究が！）いかに、すでに見たり聞いたりしたことの確認にすぎないかということです。勝敗の分っているゲームの結果をあらためて論じている。だれかれの言葉をさらに繰り返し、論じ合う。ほとんど論じるという形でしか、新しいことをいっていない。ですから、新しさは、言葉でしかない。そのために、みんな新しい言葉をなんとか考えだそうと努力している。変なことだ、と思いました。

三世紀に書かれた、こんな言葉があります。

知恵をになった言葉は
主の賜物であり、
本当の生き方を知らしめる。
天の高みによって、豊かに実らされたのでない言葉、

ただ、天や地を測ったり、
定義することをしたがるだけの言葉、
太陽や星々の
距離や大きさを知りたがるだけの言葉、
これらの言葉は　人間の発明したものだ。
むなしく働き、
無益な虚栄のために
重要でないものごとを探し求める
人間の発明したものだ。
これらの人々は
無益な労苦の中に時を失う。
ちょうど篩（ふるい）を用いて
井戸から水を汲むように。
被造物の神秘は　かれらにとって
いつも隠されていることだろう。

（大アントニウス）

あれも覚えろ、これも覚えろといわれ続けている子どもたちは、ひょっとしたら、このヨーロッパ中世の人のいわんとしていることを予感しているのかもしれません。あれこれではない、自分を元気づけてくれる言葉がほしい。そのような見通しのある世界を教えてほしいと子どもたちは願っているのでしょう。新しいのでもない、古いのでもない、子どもたちの「いま」に働きかけてくれるような言葉です。

かなり前のことですが、忘れられない思い出があります。文庫に来ていた、とおるくんは、なかなかのきかんぼうでした。学校でも手をやかれ、叱られてばかりいる様子でした。暴れては、友だちにけがをさせ、みんなから敬遠されていました。彼自身の体にも生傷の絶えたことがありません。家では、おとなしくて、勉強ができる弟と絶えず比較されていたようです。とにかく文庫に来ても、ぜんぜん落着かず、一時はどうなるものかと思いました。

このとおるくん、ある日、文庫が終っても、なかなか帰ろうとしません。みんなが帰ってしまってから、よう

やく彼も帰りかけました。なんとなく、なにかありそうです。わたしは、玄関まで見送り、「じゃ、また来週ね」といって、ドアを閉めました。あ、帰っていったな、と思う間もなく、彼はもどって来ました。そして、ドアをぱっと開いていいました。

「おじさん、ぼく、いい子？」

とっさのことで、わたしも面くらいました。

「うん、いい子だよ。どうして？」

「ううん、いいんだ」

彼はにっこり笑って、元気よく、さよなら、といって、帰っていきました。

その時ほど、わたしは文庫をやっていてよかったと思ったことはありません。彼はその日、学校でも叱られ、家でも叱られていたのでした。彼の様子でそれがよく分りました。せっぱつまったとおるくんの「ぼく、いいこ？」の声が、いまもわたしの耳にはっきり残っています。彼は、それに答えてくれるただ一つの言葉を求めていたのでした。人ごとではありません。わたしたちも、実は同じ叫びをあげながら生きているのではないか。わたしは、とおるくんのことを思いだすたびに、自分のことを考えてしまいます。

たしかに文庫は、本やお話を楽しむ場所です。でも、それ以上に、わたしたちが子どもたちと向いあう場所です。語りかけ、聞くということ自体が、もう普段の関係とはちがいます。いのちに触れる、もっと深くて、重いものが、そこにはあるように思えてなりません。何冊本を読もうが、どんなにお話を知っていようが、それはあまりたいしたことではありません。一つのお話を、一つの世界を、精一杯語り、聞こうとすれば、そこにはもう、測ることのできない何かが、語り手にも、聞き手にも起っているのだと思います。

さて、ここまでくれば、本を選ぶ秘訣は、ごく簡単です。一つでいい、その子が好きな、一つのお話、一冊の本が見つかればいいのです。それが糸口になる。

あまり本を読んだ経験がないまま、五年生くらいにな

って始めて文庫に来る子がいます。そういう子どもたちはどうかな、と見ていますと、とても面白いことに気づきました。たいてい、まず二、三年生の子どもたちがよく見ているような絵本から出発します。もちろん、わたしたちの文庫では、これは何年生むきの本だとか、あなたは何年生なのだから、これくらいの本を読みなさいなどとは決していいません。

「後もどり現象」だね、などと、わたしたちはいっていますが、たしかにその通りです。でも、その後が面白い。いつまでもそれが続くわけではありません。いつの間にか、そういう子どもたちも、だいたい自分の年令相当の題材を扱った物語に行きあたり、読みふけるようになります。面白いものです。

それよりも、子どものタイプによって、こうもちがうものかと思わされることがあります。外向的で、いかにも才気かんばつに振舞う子よりも、ひかえ目で、どう見てものろまで内気な子が、はっきり自分の好みを知っていて、さっさと気にいった本を選んでいるのです。外見に相違して、迷わないのはこの子たちです。

たしかにこれは、臨床心理の場でも確かめられていることのようです。ユング派のディークマンというドイツの学者が、はっきりそのことをいっています。子どもの頃、心に刻むお話をしっかりもっていて、それをその後の人生の糧にするのは、ほとんど内向的な子どもだというのです。外の世界に不安を抱けば抱くほど、そうした子どもは、確かな心の世界を内に育てようとする。よい文は、その適切な助け、また糧となっていると。

そのお話、知っている、知っている、を連発する物知りの子どもが多くなりました。よけい知っていれば、それで満足する世間の風潮が、子どもにはっきり表れています。子どもでもこういう子は、勉強のできるよい子で通っているのかもしれません。でも、胸に響くようなお話一つも、自分のものとして暖め、持っていることができないとしたら、その先、どう人生を豊かにしていくことができるでしょうか。

サンテグジュペリの「星の王子さま」の一節にあります。

「人間たち、どこにいるの？」と、王子さまは、（花に）ていねいにたずねました。

花はある日、隊商の通ってゆくのを見たことがありました。

「人間？　六、七人はいるでしょうね。なん年かまえに、見かけたことがありましたよ。だけど、どこであえるか、わかりませんねぇ。風に吹かれて歩きまわるのです。根がないもんだから、たいへん不自由していますよ」

急ぎ足で、あちこち探し求めて歩くわたしたちには、根がありません。根がないわたしたちが、どうしたら、枯渇せずに生きていけるのか。

「歩きまわるよりは、あなたの足もとを深く掘ってごらん」と、ふくろうはいいます。

何を探しているのか分らないままに歩きまわるよりは、深く掘るのだといいます。一つの言葉、一つの物語、いや、一つのいのちを静かに見つめてごらん。その深いところに、泉は、ちゃんとわいているではないかと。

（新潟医療短期大学）

子どもの会話（その二）

無藤　隆

幼児は、親とのやり取りで多くを学んだ後、徐々に子どもの世界に入っていく。子どもとのやり取りは、初め、なかなか成立しないが、共通の基盤を元に次第にやり取りが成り立っていく。ここでも、母子の場合と同様に、相互の承認を共にすることの上に、定型的なやり取りと素朴なごっこあそびとが大事な役を果す。（その詳細は、次の文献に譲り、ここでは省く。内田・無藤「幼児初期の遊びにおける会話の構造」『お茶の水女子大学人文学部紀要』一九八二、三五巻、八一―一二二ページ。無藤「社会言語知識―ルーチン、テーマ、協力」『会話能力の発達段階』科学研究費報告書、一九八五年

三月、九一―一〇九ページ。）

幼児も、三歳を過ぎると、機会が十分あれば、かなり友達同士遊べるようになる。そして、通常、三、四歳で幼稚園に入り、友達づきあいを本格的に開始する。子ども同士の会話が花開くときである。これから数回に渡り、幼稚園生活の中での子どものやり取りのあれこれを眺め、検討しよう。まず、ごっこあそびの様子を見てみたい。

一　ごっこ遊びの成立

子どもの様子の検討の前に、ごっこあそびが成立するまでの発達を簡単に述べておこう。まず一歳台において子どもは見立てが出来るようになる。見立てとは、あるものを違うことを承知しながら別の物と見なすことである。初めは、名付けるだけかも知れないが、すぐに、ふさわしい動きを付け加えていく。次第に、日常での繰り返しの出来事や、時に印象的な出来事が再現され、遊びの流れを作り始めていく。また、別の見立てとその流れと結び合わされていく。

ここまでくると、ごっこ遊びらしくなってきている。本格的なごっこ遊びになるためには、子どもの役割が明示され、設定がはっきりとし、計画が述べられ、しかもその間に統一があって、一貫した流れ、それも出来れば、物語になっていることが望ましい。さて、問題にしたいことは、このような本格的なごっこ遊びがどのように成立するかである。しかも、それは、同年令の友達の間で交渉され、維持されるものでなければならない。これは、ごっこが、現実の上に架空の「世界」を作り上げることであることを考えると、決して容易なことであるまい。

二　ごっこ遊びにおける会話

五歳児が数人で、大型積木を使ってごっこ遊びをしている例を次に挙げ、考察していこう。

例　五歳児のごっこ遊び

A　（直方体の積木を二個並べて置く。）

B　（Aを見て、別の形の積木を取り出す。）

A↓B　階段登るとこ、作るんじゃないんだよ。宇宙船作るんだ。（Bは立方体の積木を取り出す。）

A↓B　あー階段？（B、積木を階段状に並べる。）

Aは、何かを作り始めてから、Bが積木を取り出したのを見て、階段を作るらしいことを察知し、否定する。それは、自分が宇宙船を作ることに合わないからだし、おそらくその遊びにBを入れたいからである。宇宙船を作るというAの発話は、Bの行動の否定の理由であると共に、理由になりうる由縁は、遊びの誘いの発話だからであり、さらに、遊びの誘いは、遊びのテーマを述べることで行っている。このテーマは、同時に、具体的に積木で作るものを表している。

先↓A　何作っているの？

A↓先　よっちゃんとね（　）代わりばんこに（　）を落とすの。

先↓A　え、何？

A↓先　落とすの、代わりばんこに。

先生がAの所にやって来て、問いかける。単に積木をしているかというのではなく、何かを見立てていることを前提に尋ねている。しかし、Aは、テーマの合意が成り立たなかったせいか、積木をAとBとで交互に取り出すことを述べ、二人が分担をしながら一緒に遊んでいることにしようとする。

先↓B　よしひろくんは何作ってんの？

B↓先　橋。

先↓B　橋、作ってんの。

先生は、一見して別々の物を作っているようなので、Bにも尋ね、Bはテーマを述べる。Bは、Aの誘いにもかかわらず、自分だけのテーマを言い、結果的に別々であることをはっきりさせている。

（3分ほどたって）

E　（Aに近付き、宇宙船の中に入る。）

E→A　あのタイヤ、こっちに持ってきて。これだ、こっち。

A→E　違うよ、何で。これ、宇宙船作るんだから。

E　（外の所に行ってしまう。）

Eが板の上のブロックの位置を指示すると、Aは拒否して、理由にテーマを挙げる。Eは「タイヤ」と言っているので、おそらく車を作っていると考えて、修正しようとした。あるいは、Eは宇宙船のテーマを了解した上で指示しようとしたのかも知れないし、Aも後から来たEに指示されるのが気にくわなかったのかも知れないが、ともあれ発言の上では、テーマに合わないということを理由とし、Eもまたそれを一応受け入れている。

（すぐにDが加わる。AとDは一応完成した宇宙船の椅子にすわる。）

A→D　これがここに合体する。ここに合体。これがね、合体してね。

A　（積木に触り、前後に動かす。）

D　（前にある板の上に手を延ばして置く。）

Aはほとんど完成した宇宙船の椅子にすわり、Dに宇宙船の機能について説明する。Dも真似して動かそうとする。作られた物が、形だけでなく、その上で遊び、動かすことが出来るものであることが明らかになる。しかも、「合体」という言葉で、宇宙船の働きの一部であることが分かる。

（少しして）

A→　（笑いながら、後ろを見て）これ、車も乗れるんだよ。この宇宙船、何でも乗れる。ロケットでも乗れる。

Aは、後ろで遊んでいる子に宇宙船の機能を説明する。自分が作ったものの素晴らしさを自慢すると共に、周りの既に遊びに参加している子どもと参加するかも知れない子どもに宇宙船の働きに関して共通の理解を作っている。「ロケット」という言葉を使うことで、宇宙船の遊

びらしさが強調される。

（Eが戻ってくる）

A、D　（橋を作ったBがそこを登り降りして、床に寝そべったのを見ている。）

A→DE　それでは、宇宙まで出発しますから。

E→A　ゲー。

D　（Dは、前にある板の上のブロックを触り、操縦の動きをする。）

Bが起き上がったのをきっかけとして、Aはこれからのごっこの世界での行動を宣言する。この言葉は、船長の台詞とも、ナレーター＝演出家の指示とも聞こえる。Aの指示に対し、EとDは即座にふさわしい行動を取る。擬音を出して運転する。

A→DE　（積木に触る。）いちごーさん発射！

バーン、ヒューブーン。

E→A　発射してるう。（D、笑う。）

A　運転。

（　　）ガーピーガーピー。

E　バキューン。

Aはあくまで主導権を取って、船長としての台詞を述べ、話を先に進める。他の二人はそれを認めるだけでなく、一緒にごっこの世界にいることの喜びをあらわにする。擬音は宇宙船の動きを示し、さらに何かの物語を暗示しているかのようだ。

（遊びがかなり進行した後、Eが抜ける。）

A　ビビビビビ。早く来いよ。（おそらく近くにいるFを誘っているのだが、Fは気が付かない。）

ピピ、ピピ、ピピ、ピピ、・・・困るなあ。壊れているよ。

ピピ、ピピ、ピピ、ピピ、・・・・・・

まだかな。（　）まだかな。まだ来ないのかな。

Aはごっこの中の演技によって、Fを誘おうとする。Fが現実に気付かないのを通信機の故障のせいにしようとし、ごっこの世界を維持する。

この遊びはまだまだ続くのだが、ここで切らざるを得ない。しかし、ここまでででも十分に、ごっこ遊びが子ども達にとって様々な要素を含む豊かなものであることが理解できよう。

ごっこは、物を見立てることを核としている。既にある物を見立てるばかりでなく、前もっての物のイメージを頼りに組み立てていくこともするし、それが楽しみでもある。この場合の物の見立ては、同時に話のテーマでもあり、話の展開を促すものである。その見立てられた物に支えられて、見立てを用いた話が展開していく。物の配置は、見立てと話の展開にとって大事であり、ゆるがせに出来ない。作られていく話は、物への働きかけが言葉や擬音によって意味が明瞭にされながら進められる。

何がテーマであるかは、ごっこにとって決定的であり、ごっこ遊びに加わることは、テーマに賛同し、テーマにふさわしい行為をすることである。役柄は明示されることもされないこともある。その役を決めること自体、遊びの成立にとって重要なことである。自然に決まり、明示されない場合、行動から明らかである。

ごっこは、現実の物や人を組織し、適当な動きをして、架空の物語を成立させ、矛盾なく維持していき、しかも、それらが参加者の間で絶えず共有されて続けていなければならない。このような目に見え、耳に聞こえる現実と架空の物語の間の支えあいと峻別とを友達の間で共有しようとすること、これはまさに幼児の会話と人間関係の成立にとって挑戦的課題なのである。

（お茶の水女子大学）

子どもたちのこと

大橋利恵子

「おはよう」と元気に声をかけると「おはよう」と元気な声がもどってくる。その時から、朝の家庭での忙しさも、後である研究会のわずらわしさも忘れて、お昼に食事をしてほっとするまで、夢中で子どもと過す毎日、そんな毎日がもう十数年も続いてきた。まだ十年と言う方もたくさんいらっしゃると思うけれど、されど十年！
いつまで続けられるか、続けるのか？全身の力でとびついてくる子どもを受けとめられなくなってきた体力に不

安を感じながら、先のことよりとりあえず「今」だ、「今」を大切にしなくては……と心に言いきかせている。それにしても十年以上たっても、わからないのが子ども、むずかしいのが子育て、でもかわいいのが子どもでうれしいのは子どもの成長と実感している。

わからないと言えば、何も言ってくれないK君をすぐに思いだす。K君は年少の頃はまだ慣れないから、おとなしい性格だからとしゃべらないこともそれほど問題にはならなかった。しかし、ある日、おかあさんいわく、

「先生、この子は幼稚園ではしゃべらないことに決めたと言うんですよ」

「どうして?」

「さあ、はずかしいからだと思いますけど」

そんな会話の後、もう一度よく気をつけてみると、友だちと一緒にはいるけれど、ほとんどおしゃべりを聞いている方だし、何か返事をしなくてはならない時には、友だちの方が、いろいろ聞くとK君は首でうなずいたり首をふったりして返事をするだけで話が通じるようにしている。教師もK君が近づいてきて何か言いたそうだとつい「〜したいの?」「〜ができたの?」などとこちらのほうが質問を連発して、K君が自分で言わなくても済むようにしている。家でもそうなら大変だと聞いてみると、まったく反対で、大きな声で話すし、自己主張も強いと言う。それなら何故?

それでも無理やりしゃべらせるわけにもいかないので、質問ばかりのかかわりを続けていたら、5歳児2学期になると、友だちには小さな声で少しだけ話をするようになり、そしてさらに、帰り道には大きな声でお当番のお母さんに話をしたりするようになってきたのである。5歳児の十一月頃にはみんな小学校に入る前のテストというのがある。お母さんに「名前が言えなくても、返事ができなくても気にしない心がまえでいた方がいいわよ。」能力がないのではなくて、K君の気持の問題なのだと言うことは私にもよくわかっていたので、そんな話をしていた。いよいよテストの日、何とK君は小さな声ではあったが、ちゃんと答えてきた。そして、その帰

り道、K君はお母さんに「小学校に入ったらちゃんとしゃべるよ」と言ったそうである。事実、一年生の担任の先生と話をするチャンスがあり聞いてみると、活発ではないにしろちゃんと生活していると言う。

はずかしいからしゃべれなかった。そのうちにしゃべらなくても生活できるのでしゃべらないことにしてしまった。でもやっぱり小学校ではちゃんとしよう。K君の気持はそんな風だったのだろうか？　私がK君の心を開ききれなかった。それは事実だと思う。でもいまだにK君がどうしてしゃべってくれなかったのか本当の所はよくわかっていない。なかなかしゃべれない子やほとんど単語でしか話をしてくれない子に出合うことはよくある。しかし、自分から「しゃべらないことにする」とか「小学校に行ったらしゃべる」とか宣言する子ははじめてだった。もしかしたら、そう宣言することがK君の気持にはずみをつけることだったのかもしれないなあと思ったり、とにかく元気に一年生になってくれたのだからそれでいいやと思いなおして、心残りな自分をごまかしている。

さて今度は、やはり何よりうれしいのは子どもが成長したなと思う時だという話。誰でも一年経つと、わあ、変ったなと思えるものだが、特別に事情があったり、障害があったりした子がすくすくと伸びてくれると大変うれしいものである。

S君は3歳の冬にげきの会などがきっかけで登園拒否が始まり、少し無理をさせたことで強度のチックになった。保健センターへ相談に行った母親は、家庭で親子でじっくり生活することをすすめられ、その幼稚園をやめた。そしてしばらくは家の中で過していたのだが、一人っ子のS君は当然のように、友だちを求めて近所の友だちの家に行っていることが多くなった。そんなに友だちと遊びたいのならと、母親は当園に入園できないか相談にみえた。しかし、S君自身は幼稚園には行きたくないのだから、すぐに喜んで来るはずがない。始めは好きな時間に親子で遊びに来ることにした。遊びにといっても母親はそばから見ているだけだった。そのクラスには、

とても人なつっこい、誰にでもすぐ声をかけていくことができるT君という子がいた。T君はそんなS君にもまったくふつうの子と同じように声をかけ、一緒に遊ぶきっかけを作ってくれるのだが、少しかかわるとすぐに帰りたいということが多かった。

ある日、T君たちと園庭で遊んでいる所にS君が来た。その日はよいお天気で気分もよかったのか、S君は教師と一緒にかくれんぼに参加してきた。しばらく遊んだS君はそれからT君と仲よしになっていった。教師とT君を手がかりにS君はだいぶ幼稚園になれてきたようだった。しかし、それは一時的なことだった。その日ははじめてのプールあそびをするので、着がえの手伝いやら消毒やらでてんてこまいだった。プールに入りたいような、でも入れないような気持だったS君は何かぐずぐず言ったり、のろのろしていたりした。気のみじかい私はおもわず、「さっさとしたくをしてね」といつもより少し強い口調で言ってしまった。そのとたん入ろうかなという気持はS君になくなってしまったようで、母親とさっさと帰ってしまった。しまった！　とも思ったし、あ〜あとも思った。しかし、ぐずぐず、のろのろしていては困る状態の中で叱ったわけでもなく、私としては早くしてねと言っただけなのに……。こんな小さなことだけで気持がくいちがって登園したくなくなるのなら、やはりそれはおかしい関係で安定した人間関係ではない。

夏休みの間、私はいろいろ考えた。集団の中に入れよう。他の子と一緒にしようと私はいつのまにかそういう意識を強くもってはいなかっただろうか。そしてさらに尊敬する大学の先生に「相手を自分がなおしてやろうという気持を持って接しているとだめなものですよ」と大変的確なアドバイスをしていただいた。そうだ、私はT君の力も母親の力もかりずにS君と私の間に信頼関係を作らなくてはならない。やりなおそう。

二学期になって、私は午後、S君と二人で遊ぶ時間をもつようにした。ブロックをしたり、絵本を読んだり、S君とだけできるように。しばらくすると、S君はまた午前中に遊びにくるようになった。今度は本人の意志

で、ここの所が大切なのだと様々な学習をして気づかれたお母さんの変化と、S君と私の関係の変化といろいろなことがかさなりあって事は好転していった。ある日、家からザリガニをもってきてくれたS君に「どこにいるの？」「うちの横」「たくさんとれる？」「うん」「みんなでとりにいきたいね」「いいよおいで」ということになり、3〜4日後、S君を先頭にみんなでS君の家までザリガニとりへ出かけた。その時のS君のうれしそうな表情。帰りには園まで友だちと手をつなぎ、列にならんでわざわざ園までもどってこれた程だった。

その後、S君は徐々に長時間園で過すようになってきた。家もT君のすぐそばに引っ越して、午後もT君とよく遊ぶようになり、すっかり園生活になれていった。

四歳児クラスがおわり、五歳児クラスに進級したとたん、S君は自分から給食もたべ、みんなと一緒に登降園するようになった。今ではごく普通の一年生である。心配してS君とT君とを一緒の学級にしてほしいと小学校へ申し送ったがかいもなく、二人は別々の学級になった。しかし、そんな心配は全くいらなかったことを知らされて、うれしい思いである。

一人一人の人生はドラマだよとよく言われる。確かに私自身だって人と同じようには生きていない。どちらかと言えば平凡ではない人生なような気がする。そして一人一人の子どもにだって、平凡にしろ、非凡にしろ、もうドラマが始まっているように思えるのである。一人一人の育ち、生活、人生をある時交わって生きていくことのおもしろさと大変さと……。

さて、明日の私の運命はいかに？

（岐阜北幼稚園）

娘と自転車で考える

上村　英明

一歳になった娘は、つかまり立ちを卒業して歩きまわるようになった。自然と散歩に出ても、公園中を縦横にあるきまわっている。行動半径も大きくなって、ベビーカーで往復できる範囲から、自転車に補助イスをつけて遠くの公園にまで足をのばすようになった。三時から塾の仕事をはじめる私は、午前中は自由になることが多く、午前の散歩を一週間の二分の一は、担当している。

幼児用の補助イスは何とか工夫できないか。

娘を自転車で公園まで連れ歩きはじめて、いろいろと考えることがあった。

まず、最初に補助イスの問題である。補助イスは、妻が近所の自転車屋で着けてもらったのだが、ハンドルの手前につける。標準的なものだそうだ。娘をのせて近くの駐車場で試運転をしてみると、どうもぎごちない。よくみると、ひざが補助イスにぶつかるのである。自慢ではないが、私の足は短足の代表みたいなものだ。足のせいではないとすると、サドルと補助イスの位置関係の問題か。補助イスの取り付け位置を変えればとやってみたが、それも無理そうであった。

その後、公園などに止めてある補助イス付きの自転車をシゲシゲと観察したが、補助イスの位置は似たりよったり。運転技術でカバーするしかないと意を決したが、運転技術を向上させるということは、一言でいえば、ガ

ニ股で自転車をこぐということである。かっこうを気にする私ではないが、ガニ股でこいでいても、カーブを切る時に足が補助イスにかなりの頻度でぶつかってしまうということである。危うくバランスをくずしてヒヤッとしたことが何度もあった。さらに、何かの拍子でペダルから足をはずした時に、もう一度ペダルに足をかけ直すのが、結構たいへんなのである。

我が家が位置する東京、江戸川区の南部一帯は、自転車道が整備されていない。せまい車道に、さらにせまい歩道が申し訳に付いているだけである。結果的に、娘と私は、車道を通ることも多い。車とすれ違うたびに急停車することもある。かなり緊張度の高い運転を強いられる。もちろん一才前後の幼児は、運転者の前にすわっている方が、なにかと便利である。しかし、前輪の上のバスケットを脱着可能にして補助イスを運転者向きにとりつけることなどはできないだろうかといつも思う。

自転車の上で街づくりを考える

街に緑が少くなったといわれている。しかし、何故緑が必要かといわれると、都市生活者としては殺風景になったと感性の問題を訴えるくらいのものだろう。もちろん感性の問題も大切であるが、さらに加えて、木かげの必要性を最近はとみに感じるようになった。

娘と私が自転車でよくでかける区立F公園は、我が家から環状七号線を自転車でゆっくりと20分くらい南下しなければならない。その20分の道すがら、木かげというものがほとんどないのである。七、八月の炎天下ともなると、娘にもそして運転手の私にもこの20分はかなりきつい。もちろん、娘には麦わらぼうしをかぶせてはいるが、娘は帽子というものがいやでいやでたまらないようだ。自転車にのってビューピュー顔に風があたっているのが好きな娘は、汗をピッショリかきやすい頭や髪も風ですずしくしていたいとしょっちゅう手で帽子をとろうと努力している。

特に横断歩道の手前には、木かげがほしい。一カ所だけある木かげに来ると横断歩道が赤でなくとも自転車を

とめて、娘の帽子をとってホッとすると同時に、私もひと息つくささやかな瞬間である。木かげのない横断歩道では、これと対照的にジリジリとしてくる。『早く、青に変わらないか』と、陽炎の立つ路面をにらみつける。

大きな緑地帯をつくり市民の公園にするのもよい。グリーンベルトや小さな花壇を作るのも必要だ。しかし、もうひとつ、横断歩道のある交差点のすみずみに大きな木でも植えたらどうだろう。炎天の日は、涼しい木かげを、にわかに降りはじめた小雨には一時の雨やどりの場所を提供してくれることうけあいである。街は、屈強で元気な若者あるいは中年の男性だけのためにあるのではない。幼児や病人、障害者が、木かげのない、アスファルトの照りかえしで陽炎のゆらめく道路を一時間も歩けるものではない。道路をつくるなり、街をつくるなりに、こうした複数の視点がほしいと痛切に考えている。

私たち親子が以前住んでいた地域にはたいへんりっぱな自然公園風の大人工公園があった。遊歩道を兼ねたジョギング・コースがあり、池があり、各種の樹木が子供たちの観察用にと植えられていた。管理もしっかりしていて、公園内の清掃や見廻りも適宜行われていた。

しかし、人工的な公園が立派であればあるほど、また施設が整っていればいるほど、何か底の浅い寒々とした感じをぬぐい去ることができない。立派であるとか、整っているという表現は、実は、万人にとってそうであるのではなく、ある特定の人たちにとってそうであることがよくわかった。立派なジョギングコースは、ジョギングをする人たちにとって立派であり、整ったゲートボール場は、ゲートボールをする人たちにとって整った場所なのである。特に、低年齢の子供たちが、遊びという時、それはサッカーや野球といった特定のスポーツを意味するのではない。水遊び、砂遊び、土いじり、草の葉むしり、あるいははだしで黙々と歩き回ることだといえる。つまり、こうした子供たちにとっては、公園は特定のルールのない大ざっぱな遊びをする多目的・多元施設でなければならないようだ。

新しく引越してきたこの江戸川区には、いくつも娘と私が大いに気に入っているこうした公園が残っている。区立A公園は野球場とサッカー場に使われているが、一方のコーナーにバックネットがあり、反対側の両サイドにサッカーゴールがおかれているといっただけの簡単なものだ。バックネットから内野のあたり、ゴールの前だけ土が露出しており、あとは一面雑草の草原である。もちろん施設がその程度だから、ママさんサッカーチームの練習場や町内ソフトボール大会が開かれ、公式大会などとは縁遠い、まさに草野球であり、草サッカー場である。

私たち父娘がこの公園に行くお昼前後はガラガラで、私たちは、よく自転車で公園のど真中にのりつける。まわりを見廻すとまさに草の海である。娘を自転車から降ろすとキャッキャッといって喜んでいる。都会では緑化が叫ばれ、申し訳程度に、緑が切り売り型で保存されるようになった。しかし、私が少年期田舎で経験した緑とは圧倒的な緑であり、生き生きとした力ある緑であった。確かに公園の一区画内ではあるが、この公園の中に立つと緑の力強さを再び思い出すことができる。娘は元気に葉っぱをちぎっているし、時々現われる虫にびっくりしたりする。立派でも整ってもいないが私たちには大切な公園のひとときである。

もうひとつ私たちがよく通うF公園は、やや人工色の強い公園だが、噴水の水を利用して低年齢の子供たちが、利用できる浅い流れが作ってある。男の子も、女の子もこの流れの中を丸裸体で、あるいは、パンツ一枚で、キャッキャッと遊びまわっている。少し大きくなると上流にある噴水の中で腰まで水につかって泳ぐ子がいる。お母さんたちもスカートをまくって噴水の中で子供と遊んでいる。話をすると少しばかりのけがや病気はいとわないという「自然派」のお母さんが多いが、都会の光景にしてはほほえましい。私たちも娘のリュックに替えオムツとタオルと着がえを持って、この公園によくでかけるがその理由は次の二つだと思う。

もっとも大きな理由は、管理がうるさくないことであ

る。流れの中で丸裸体で遊んでいても、噴水の中でみんなで泳いでいてもだれからも注意されないことである。今だに噴水の中で泳いでいいのか、あるいはその噴水はどれくらいの水質なのか本当の所はよくわからない。しかし、まるで、自分のお子さんと自分の責任で自由にお使いくださいといわんばかりである。渇水がさわがれた今夏も、他の二つの大噴水の水は止められていたが、子供用の流れがある噴水だけは水量が減らされたもののずっと水は流しつづけられていたから、この推論はそんなに間違ってはいないだろう。

もうひとつの理由は、第一のものとも関連するが、自由に利用できる広い芝生地が流れのまわりに用意されていることである。芝生は、子供の着がえに好都合である。立たせたままでオムツをかえたり、何か一枚下に敷して寝ころがらせるにしろ芝が一番いいようだ。また、帽子ひとつかぶせておけば炎天下でも自由に子供を歩きまわらせることができる。裸足でなるべく育てることに我が家では決めているが、夏の炎天下では、アスファルトやコンクリート、石だたみ等のいわゆる西洋風の立派な公園はこの教育に全くなじまない。その点、土の公園はましだが午後一時・二時にはやはり熱い。裸足で歩くには、特に夏は自由に歩ける芝生地が最高だろう。

最近では、同じ芝生の公園でも芝生には立入り禁止の札があり、その横にベンチがおいてあるケースがしばしばである。幼児無視のいわゆる男性の発想であり、管理の思想である。へたなカーブを持ったベンチでオムツでも替えてみれば、そうした公園の不合理さがよくわかるはずなのにである。

（川崎市平和資料室）

若いお母さんたちへ

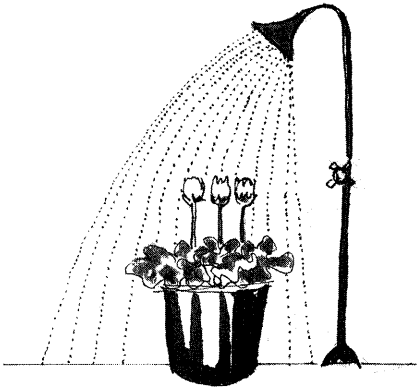
姉妹のかかわり

はるにれの会
榎田　二三子

子育て六年目。二人目の子どもが生まれて四年目を迎えています。仕事をしている頃、子どもが二人になると忙しさは二倍以上でしたが、それが今では夜中に起こされることも少なくなり、熱をだしたりすることも減り、子どもたちは大きくなってきたのだとつくづく思います。今回は、そんな二人の今までを見つめてみたいと思います。

〈妹の誕生〉

長女A（五才）と二女M（三才）は、ちょうど二才違いの姉妹です。お人形遊びが好きだったAにとってMの誕生は、まさに生きたお人形の誕生でした。話しかけたり抱いたり、泣き始めるととんで行ってあやしてくれました。時には、おしめを取り替えると言ってMをおしりまるだしにしておいてくれることもありました。よくかまってくれましたが心の中はおだやかでなく、物をなげたり、トイレットペーパーやティシュをたくさんだしたり、私にしかられるようなことをしたりということも多



く見られました。母親である私がMを抱いている時は、（と言っても母乳をあげる時と、ひどく泣いている時以外は抱かず、Aと遊ぶようにしていました）Mをたたいたりしないのですが、父親がMを抱いていると、たたいたり、かみついたりすることもありました。けれども、しだいに落ち着き始め、三ヶ月程たつ頃には私からも離れとなりの家へ遊びに行くようになり、友だちとの遊びが楽しくなってきました。

Mが半年を過ぎ、だんだん存在感がでてくると、（今まで寝てばかりいた子が、起きている時間が長くなり、おすわりをして部屋のまん中にすわって遊んでいたりするわけですから）「まき、すこししかかわいくない。」と言い、自分のおもちゃは貸してあげなくなりました。これから半年近くは、Aのぜん息の発作もひどく、日常的な忙しさからくる私のイライラとAの気持ちのゆれがからみあい、親子三人こんがらがった毎日を過していました。

〈妹の行為を受けとめるA〉

Mが生まれてしばらくは、自分の赤ちゃんの時の写真を見て、「これは、まーちゃん。」と言っていたAが、自分が赤ちゃんであったことを受け入れ始めました。そうすると、今のMは、こういう時で、Aが赤ちゃんの時も同じだったと話すと、一応わかってくれるのでした。ちょうどMは、破いたり、とったりということをする時で、Aが作ったこいのぼりについている折り紙のうろこを取ってしまったり、絵本を破いてしまったりということが多くありました。それでもAは怒ったりせず、「しかたがないからやりなおそう。」と言うのでした。Aには、Mの存在をまるごと受けとめる余裕が十分にありました。

ちょうどこの頃一才になったMは、A（三才）にとても関心があり、Aとのかかわりが強くなってくるのでした。そんな時、Mのすることを見たてて受けとめることで、AとMの関係が変化していくことがありました。

寝起き――Aは昼寝の寝起きが悪く、いつもよく泣き

ます。この日は、少し早く起きたMを抱いていたらAが泣きました。Mをひざからおろし、Aを抱きます。気げんの悪いAは、Mにちょっかいをだしました。ここでMが泣くと、どうにもならなくなるのですが、Mは、けたけた笑ったのです。それを見て、Aも私も笑いだし、Aの泣き虫は終ったのでした。

見たて遊び――MがAの大切な人形を持って来ました。Aは袋に細々したものを入れて遊んでいて気づかない様子。このままでAがMに気づくと、「あきの人形だめ。」と言って人形を取り上げ、どんとつき倒してしまうので、一足先に「ばあやが赤ちゃんつれてきましたよ。」と言うと、Aは「あっ、ありがとう。」と受け取り、Aの遊びは続きました。

ブロックで私と遊んでいる時など、Mは気になって近づいて来て、Aの作ったものに手をかけて、こわしてしまいます。すかさず、「地震だ。」と言うと、Aも「地震だ。」と言ってこわしごっこになりました。

父親との遊びの楽しみは、お馬ごっこ。父親にAが乗ると、Mがとことこ追いかけます。Aは、「まきかいじゅうがきた。」と大騒ぎ。馬に乗って逃げまわります。Mもおもしろくて後を追いかけます。

AやMの行為を見たててしまうことで、そこに笑いが生まれ、遊びに変っていきました。けれどもMの行動が豊かになり、受けとめきれなくなることもありました。

〈だめの時期〉

砂山作り――前日ブランコに乗りたくて公園へ行ったのですが、混んでいて乗れず、あきらめて帰ってきました。A（三才三ヶ月）は不満でした。そこで、今日は思う存分ブランコに乗ることができ、公園の中を三人で散歩したあと、砂場でAが、「山をつくろうか。」と言いだしました。二人でせっせと作り始めました。M（一才二ヶ月）は拾ってきたコップに砂を入れ、こぼして遊んでいました。そのうちMは、Aが作っている山の砂を取り始めました。「まーちゃんやだ。」とA。「まきに負けないように頑張ろう。」と私。「がんばろう。」とA。三人

で競争し、一瞬わあーとなったところで、AがMの背中に砂を入れました。とっさにAをしかってしまいましたが、Aの遊びに入ってくるMを受けとめ、一緒にというのは、とても無理なことでした。

ままごと――M（一才三ヶ月）が食器棚の下からお皿をだし始めました。そのお皿をA（三才三ヶ月）が持って行き居間に並べ、「お弁当にしようかな。」と言っています。Mのおしめを替えているところへ、ごはんを作って持ってきてくれます。寝っころがっているMがお皿を取ると、「まき、だめ。」ケーキの箱にブロックをつめている間にAのお弁当箱をMが取ると、「まーちゃんだめ。」「まきもお弁当がほしいんだって。」「だめ。」「もうひとつ作ってあげれば。」と言いつつ、Mに作ってあげると、Mはにっこり笑います。Aはケーキの箱とお弁当箱を持っておもちゃの部屋へ行きました。Mも追いかけます。その目の前でドアをしめられましたが、ざぶとんがはさまり、すぐには、しまりません。「あなた、行ってらっしゃい。」（私は、けっしてこのようなことを言わないのですが、どこで覚えてきたのでしょう。）とAに言われ、Mは私のところへ来ました。しばらくして、「あなた、おかえりなさい。」という声。Mに「ほら呼んでるよ。」と言うと、Mはおもちゃの部屋へ入って行きました。「あたし、おかあさんなの。」とMをだっこして見せに来ます。

この時期のAは、友だちと一緒に遊んでいる時に、だめと言われることの多い日々でした。そしてMに対してだめと言う日々でした。Aが充実しきれない日が多く続きました。

〈友だちと楽しい時を過す〉

三才四ヶ月の春から一年間は、Aと私にとってそれは楽しい時でした。と言いますのは、同じマンション内に親子共気の合う友だちができたからでした。毎日のように行き来をし、朝から晩まで楽しく遊んでいるのでした。家にいれば、AはMにじゃまされると思うことも多く、その不満を友だちの家で思う存分楽しいことやいた

ずらをすることで充たしてくる様でした。Mはといえば、Aと一緒に行きたいのですが、途中で泣きだすので置いていかれ、母とのんびり遊んでいました。

四月からAと友だちは、同じ幼稚園へ一緒にかようことになり、親子共々楽しみにしていたのですが、我家は新潟転勤になってしまいました。

〈大きくなったM〉

新潟に来てすぐは、Aにとって親しく遊べる友だちはMであり、母でした。異った環境にぽんと入ったAとMは、姉妹というつながりで、しっかり向きあったのでした。そして、しゃべることが苦手であったMが、しゃべることに関して大きく伸びたのが、新潟に来てから、二才四ヶ月過ぎでした。

Aとも話が通じる様になり、二人がおしゃべりをしながら遊んでいることがよく見られる様になりました。また夕食時や夜寝る前などは、二人が同時に話し始めたり、割り込んで話し始めたりするので、たいへんです。首を左右に向け、二人の話を同時に聞いたり、「ちょっと待ってて、こっちの話が先だから。」と交通整理をしたりしています。

二人の生活時間帯もほとんど同じになりました。朝起きてから二人でしばらく遊んだあと、Aを保育園へ送って行きます。Mは午前中を友だちと遊んで過し、午後は昼寝。Aが帰ってくる頃に起きます。そして夕方まで友だちと遊んで過します。Aが保育園へ行くようになり、Mと私だけの時間はあるのですが、Aと二人だけの時間が、ほとんどなくなってしまいました。秋から冬にかけ、牧場へ散歩、そり遊びとMと友だちと私が楽しく過していると、「まーちゃんはいいな。」ということばが、Aの口から出てくる様になりました。

〈つっかかる二人〉

五才と三才になった冬。けんかと言うより、ささいなことでつっかかることが多くなりました。

夜寝る前に読む本を選びに行った二人。Mが選んだ本

に、「へんなの。そんな本……。」とAが悪口を言います。Mも「お姉ちゃんのだってへんなの。」と言い返しますが、おしゃべりAの悪口には言い返しきれず、MがAをたたきます。たたかれるとAが泣き、今度はMをけとばします。そうなれば、力の差は歴然。Mが大泣きに泣き、泣きながらふとんへ入るという日が何日も続きました。翌朝になれば仲よくなるかと思うと、そうはいかず、朝、顔を会わせたところからまたつっかかる二人でした。二人いれば、けんかは日常茶飯事ですが、この時の二人は、とげとげになった二人の気持ちがひっかかっている様でした。

〈お母さんと遊びたいA〉

寒い二月、お母さんと遊びたいと言ってAは、保育園を休んだり出たりしていました。新潟への転勤後、初めての保育園で、本当にエネルギッシュに友だちの家を渡り歩き、遊んでいたAでした。そのことを思うとうその様に家にとじこもり、時々友だちが来ることはあって

も、自分から友だちの家へは、けっして行きませんでした。家にいるからといって、特別に遊ぶわけではなく、Mと二人で遊んだり買い物につきあったりしていました。けれども、よく考えてみれば、Aの生活は保育園と友だちと遊ぶことが大部分を占めていたのです。家で過すうち、いつの間にか、あのつっかかっていた二人は消え、仲よく遊ぶようになっていました。

〈Mをおんぶする〉

秋に友人宅を訪ねた時、集まった子どもたち七人のうち大きい二人が小さい子どもたちをおんぶし、世界一周と称し部屋から部屋へぐるっと回ってくれる遊びをしていました。そこから帰宅後、我家ではAがMをおんぶし、家中を歩き回っていました。このおんぶということは、この時期の二人の関係を考えてみますと、とてもおもしろいことです。食事、排泄、睡眠、着がえといった生活面では、AとMの差が縮まり、同等になってきています。けれども、おんぶに関しては、AはMをおんぶできますが、MはAを絶対におんぶできません。ことあるごとにAはMにおんぶしてあげようと言い、Mは喜こんでしてもらうのです。そして今では、「そんなことしたら、おんぶしてあげないからね。」とAは言い、Mは帰宅後、遊びにとび出して行くAに、「帰ってきたらおんぶしてね。」と言うのです。おんぶに関しては、姉と妹という上下関係が保たれているわけです。

〈Aができることに挑戦するM〉

水不足が騒がれている初夏のある日、Mと私は、友だち親子と公園へ出かけました。その途中で、Mは「今日は、お姉ちゃんが作ってるみたいな山つくるの。」と言うのでした。というのは、前回Mとその友だちと公園で遊んだ時、砂山を作り、三人でトンネルをほりうまく完成したのです。以前は、トンネルをほっているうちに山がなくなってしまうか、私ひとりが頑張って作っているかのどちらかでしたのに、今回は、すごく上手になっていたのです。それを家に帰ってAに話し、とてもうれし

く思っていたのでした。公園へつくと砂場へ直行。ぞうきんバケツでどんどん水を運び、（給水制限の行われている首都圏には申しわけない話ですが、）仲よし三人組が並んで自分の山をひとつずつ作りました。Mは大きくなった山をほり始めました。何げなく反対側からほり始めた私に対し、シャベルを投げつけ、ひとりでやりたかったのにとMは怒りました。もう一度山を作りやり直しました。私は手も口もださず離れています。黙々とほるM。けれども悲しいかな、トンネルはくずれてしまいます。遠くから私の方を見てわーと泣いているM。気の短かいMは、うまくいかないと怒ることが多いのですが、この時は怒ってはいなくて、くずれてしまったことが、とにかく悲しくて泣いている様でした。もう一度頑張ることになりました。今度はMと相談し、私も一緒にほることになりました。やっと完成。トンネルに水を流し満足するMでした。

今Mは、Aがやっているなわとびや登り棒に、できないながら挑戦しています。きっとトンネル作りもまた挑戦することでしょう。

〈そして、これから〉

四年前には、一人は寝たきり、一人は自由に歩きしゃべっていました。それがひとつずつ同じにできるようになり、今では、取っ組み合いのけんかをします。これからは、好きなこと、得手、下得手、性格の違いもお互いにわかり、葛藤も生じてくることでしょう。今まででは想像もつかないいろいろなできごとが、これから先あることと思いますが、心配ごとは、さておいて、二十年後に素敵な女友だちになっていることを期待し、その仲間に私も入れてくれないかなあなどと、勝手なことを思いめぐらす今日この頃です。

一歳六ヶ月児健診経過観察における遊びグループ指導の展開

―五年間の実践の報告―

上垣内伸子　古屋喜美代
市川奈緒子　山崎　聡子

はじめに

私達は、日本保育学第四十回大会において、研究奨励賞を戴いた。保健所における親子遊びの会という言わば周辺的な保育実践の研究発表でもあり、本当に思いがけない喜びであった。手探りの実践の中で戴いた今回の賞を、保育に携わる諸先輩方からの激励の声と思って更に精進を続けていきたい。

発表の趣旨を述べる前に、学会発表の場でも質問が集中した「遊びの会」の設立の経緯と活動内容を紹介をする。

「遊びの会」の概要

一　設立から現在までの経緯

三歳未満で発達上の問題を持ってはいるがはっきりとした障害があるともいえない子ども達の、日常的な保育の場が少ないという実状を知り、乳幼児健診で現実に親子共に日々の子育てに戸惑っているケースに出会う中で、私達保健所心理相談員は、心理相談だけではなく、実際に親と子が共に遊べる場の必要性を痛感していた。

私達が心理相談を行っている東京都練馬区では、障害

の早期発見・早期予防と同時にすべての子どもの健やかな成長を願って、親子を支えるためにきめのこまかい相談・フォロー体制を築こうと、医師、保健婦、保母、心理相談員など多様な専門職が連携して努力を重ねている。(1)また、区立の身障センターや親の会のグループ保育、幼稚園や保育園における障害児保育の取り組みはもちろんのこと、児童館の幼児グループや自主保育グループの活動も盛んである。しかしながら、前述したような親子の場合、どちらの集団にも参加することに抵抗があることが多く、地域からも孤立しがちであった。

こうした状況に応える場として、昭和五十七年五月から、心理相談員数名が学生ボランティアを募って、月一回一年サイクルの親子教室「遊びの会」を開始した。開始当初の様子を、発起人である田丸尚美は次のように述べている。

『……親にとって身近な場として、乳幼児健診から直接結びつきやすい保健所で行ってみることにした。保健所が保育園の代わりまでやることにならないか、教室を終了する目安やその後のフォローをどうするかなどの不安も出されたが、1年間の実践の後で再度考えることとしてスタートする。

そして月一回というペースでは、子どもの日常的な保育の場になりえないこと、地域のあちこちから集まることもあり、親同士が悩みを話し合えるつながりを作るのは難しいことがはっきりした。しかし、一人ひとりの親が着実な変化を見せていた。自分がからだを動かし遊ぶ体験、……（中略）……同じような育児の悩みを持つ人を知り、さまざまな親子関係のありかたを目のあたりにすること――自ら療育機関の扉をたたく人も出てきた。こうしたことから、参加する親が子どもとの関係を見直し育児の見通しを育てる効果があるのではないかと考えた。』(2)

その後、月一回という回数は増やせないものの、お弁当の時間をとったり、毎回ニュースを発行してお母さん

の声を紹介するなどの工夫を重ね、五十九年からは保健所の事業として認められて一歳六ヵ月児健診の経過観察の一環として位置付けられた。保健婦の関わりも積極的になり、六十年からは専属の保母も加わってスタッフも充実してきた。

保育者が担当の親子を決めて三人一組（時には五人一組）で活動するうち、遊びの場という気楽さも手伝って次第に打ち解けた関係ができてくる。その中で、「我が子のことを知っている他の人と話をしたい。」という欲求を母親がこんなにも強く持っていたのかとしばしば驚かされることもあり、この「遊びの会」の活動は、子どもの発達に直接働くというよりも、母親への効果や母親を通じての間接的な子どもへの影響がある活動ではないかと考えるようになった。今回の研究発表はこのことを明らかにするという動機を持って行ったものである。

二　活動内容

(1)　目的

①集団遊びの中での方向性のある動きや共同作業の体験を通して、発達上の問題改善のきっかけを得る。

②子どもと遊ぶことから現在の子どもの姿・問題等に気付く。

③親自身が楽しむ経験を積み、ゆとりをもった子育てにつなげる。

(2)　対象

一歳六ヵ月児健診心理経過観察児のうち、集団保育を経験することで発達上の問題の改善が期待される子ども。特に①多動傾向はあるが人との関係が全くつかないわけではない②母子分離不安が強く集団参加が難しい③全般的な遅れがあり、そのために過保護や放任気味になっている等の臨床像の見られる子ども。母親から、「外に出すと目が離せない」、「他の子どもに迷惑をかける」、「他の子どもとレベルが合わない」といった訴えのある子どもである。

年齢は一歳七ヵ月〜三歳、発達課題としては一語文獲得から二語文をめやすとした。

参加人数は15組前後である。

(3) 実施方法

月一回、土曜日の午前九時三十分から十二時まで、保健所の講堂において、各回毎にテーマ遊びを設定して実施した。五月から始め三月までの11回を1サイクルの活動とした。

会の流れと各回のテーマを図1、表1に示した。テーマ遊びは、初めの頃は体全体や手指を使う感覚運動遊び、次第にみたて遊び・ごっこ遊びという展開を考えて設定した。実際の活動においては、子ども一人ひとりの発達段階や興味の持ちかたが異なるので、遊びの中身については柔軟にとらえ、集団全体の動きに気付かいながらもそれぞれの親子の遊びが充実し楽しさを体験できるような保育者の関わり方を心がけた。

保育スタッフは、心理判定員5名、保母1名、保健婦1名、学生ボランティア8名。それぞれが担当を決め、母―子―保育者という3人グループを核として活動を進めた。また、「遊びの会」に慣れてきた十月に母子分離して母親ミーティングを行い、親同士の交流・話し合いの場を設けた。

研究発表

一 研究目的

本研究では、月1回の「遊びの会」が参加する親子にとってどのような役割を果たしているか、なかでも母親の子どもへの関わり方への影響について考察する。また、「遊びの会」の活動内容や実施システムの有効性についても検討する。

二 対象および方法

(1) 対象

昭和六十年度の「遊びの会」に参加し、発達上の問題の改善とともに母子の関わりや母親の受容の態度にも変化が見られたH児とその母親の事例を取り上げた。

(2) 方法

「遊びの会」活動記録・毎回の活動後の感想アンケート・母親へのインタビュー（昭和六十一年三月、六十二

年五月実施）・乳幼児健診時のカルテ記載等をもとにして事例の分析を行なった。

三　事例検討

毎月のテーマ（S60年度）

5月	シーツで遊ぼう
6月	小麦粉粘土
7月	紙ちぎり～紙ボール
8月	フィンガーペインティング
9月	砂遊び（近くの公園で）
10月	おふろごっこ／母親ミーティング
11月	箱積み木
12月	クリスマスツリー作り
1月	汽車ごっこ
2月	節分・豆まき
3月	ままごと

ここでは、H児の事例について、「遊びの会」参加前の状況・「遊びの会」における活動の変化・現在の様子を紹介する。文中の「　」は、母親の言葉をそのまま記載した部分である。

(1)　H児の成育歴

昭和五十七年十月一日生の男児。三十八週二六〇〇グラムにて出生。兄弟はなく、父・母との三人家族。乳児期には特に医学・発達上の問題は見られなかった。一歳六カ月健診にてことばの遅れ・落ち着きのなさ等の理由

会の流れ

集合・体操
｜
挨拶・くすぐり、ゆさぶり体を使った遊び
｜
テーマ遊び～あと片付け
｜
昼食
｜
手遊び・歌遊び
｜
挨拶・解散

で心理経過観察の対象となった。「遊びの会」参加時の年齢は二歳七ヵ月であった。

(2) 母親自身の結婚・出産について

H児の母親は、昭和二十四年生。二歳年下の夫と結婚し三十三歳の時にH児を出産した。H児が一歳の時、練馬区の夫の母宅の隣に転居した。

「結婚が遅かったので、子どもが出来るかどうか不安だったが、一年たたないうちにこの子ができて良かったと思った。」

(3) 「遊びの会」参加以前

転居後、母親自身も話し相手となる友達がみつからず、H児にも友達がいないことで困っていた。家の近くに子どもが少なく、公園等にいても既にグループができていて、仲間にはいっていかれない感じを持っていた。日中家にいることが多くなり、母子共に閉そく状態であった。

(4) 参加のきっかけ

一歳六ヵ月児健診の心理相談場面で、母親より、「一人で勝手に出ていく」「私がいなくなっても平気」等日常の子育ての難しさの訴えがあり、「遊びの会」をすすめた。母親は後で、「効果については半信半疑で期待していなかったが、同じくらいの子と遊ばせられるというメリットを考えて参加を決めた。外出の理由ができるので自分のためにもいいと思った。」と語っている。

(5) 「遊びの会」参加記録

毎回の活動毎の、H児—母—保育者の関わりと変化を表に示した。

(6) 初めの頃の様子

参加当初の感想として、母親は、「この子は大勢の中に入っていけない子ではと心配だったが、何とか入っていけることがわかった。」「まわりの子どもに興味を示して、これまでの一人遊びから少し変わったと感じた。けれども、一対一で相手をしてくれれば、私でなくても誰でもいいんだと思った。」と述べている。

集団の中で遊ぶ子どもの姿に、それまでとは違う何かを見いだして驚く一方で、大人から誘いかけるとだれに

でもついていくのを見て、自分への愛着の薄さも再認識した様子であった。母親はそれまでにも、駅のホームでわざと隠れてH児の反応を見ること等を試み、母親を探さず、泣きもせず、他の人についていく姿に悩んでいたという。

(7) 毎回の活動後の感想

毎回の活動後に行う母親への感想アンケートから幾つか抜粋して紹介する。

＊五月　シーツ遊び

「びっくりした。たった1枚のシーツであんなにいろんなことができるのか。」

この回の活動は体を使って遊ぶことがテーマになっており、シーツを使っていないいないばあ・ゆらゆらハンモック・タクシーごっこなど身近な遊びから、シーツの波くぐりやトランポリンといった大きな動きへと発展していく。この初回の驚きが続けるきっかけとなったようだ。

＊六月　小麦粉粘土

H児は手に何か付くという感触が好きではない。そのため、これらの月の活動でも母親の予想通り嫌がったので困惑した様子が見えた。

＊9月　砂遊び

「ふだんは砂が手についても嫌がるので今度もダメだと思っていたのに、山を作ったりして遊べた。友達と一緒ならできるかなとおもった。」

「これまでは怖がって出来なかったすべり台も、他の子どもにつられて滑っていたので驚いた。」

H児の行動に変化が現れ、母にとっては自分のイメージとは異なるH児を発見した活動となった。

(8) 「遊びの会」一年間の活動後の感想

一年間の「遊びの会」を終えた六十一年三月に、感想アンケートを書いてもらい、合わせて個別インタビューも行った。

＊H児について

「参加して良かった。何よりも同じくらいの年齢の子と遊ぶことができた。」

「一人遊びからだんだんと友達に近寄っていくことが多くなった。一人遊びしかしないと思っていたのに。」

「一月頃から『おにいちゃんになった』『しっかりしてきた』と思えるしぐさに気がついた。」

「いじめられる方だったのが、小さい子をいじめるようになっていて驚いた。」

保育スタッフも変化したと感じた時期が母親と一致していた（表1　十二月・一月参照）。十二月・一月の活動で、表情がイキイキと豊かになり、他の子どもへの関わりも増え、母親に対しても甘えていく姿がよく見られるようになった。

発達的にも二語文が使えるようになり発話量が増してきたこと、母親への甘えが出てきたが一方ではそれをガマンするといった行為が見られ、それを母親自身が感じとれるようになったこと等がこうした変化のきっかけではないかと考えられた。

＊母親自身について

「自分はなかなか人と親しくなれないタイプだが、時間をかけたら親しくなれたと思う。回数が少なくて家に行き来するくらいに親しくなれなかったのが残念だ。」

参加当初は遠くから見守る事が多く、発言も少なかったが、「遊びの会」の後半からは、他の母親へ話しかける、スタッフの中にはいって手伝う等の積極的な関わりが見られた。

(9)　母親の流産

一月の「遊びの会」活動時に、母親は保育スタッフに、「H児が可愛くなってきたし、子どもがもう一人欲しくなってきた。」と話してくれた。実際、この時には妊娠していたことが残念なことにも流産という形で判明した。母親にはH児出産後に二度の流産歴があった。

結果的には今回もまた流産してしまったが、愛着が出始めた時期に母親が床に着くことで物理的に分離を強いられ、「おかあちゃんネンネ」と自らに言い聞かせてそれをガマンするH児の姿、回復してからは「だっこ」と言って甘えてくる様子を見て、更に母子間の愛着が強まっていったようだった。

「しばらく世話をしなかったら、急におにいちゃんになった気がして、この子も成長したんだなと思った。」と母親の言うように、H児の成長に改めて気付くきっかけにもなった。

(10) 「遊びの会」終了から保育園入園へ

「遊びの会」のメンバーは、次なる集団への参加を決めて終了していくが、H児の場合も六十一年四月から保育園に通園することとなり、三月に試し保育に行ってきた。

「試し保育に行く前は、集団の中には入れるかどうか不安だった。試し保育には父が連れていったが、『はじめちょっと淋しそうにしていたがさっとみんなの中に入っていった』とのこと。すぐに慣れたことは嬉しいような淋しいような……」

「四月からは毎日保育園で昼間いないと思うと淋しい。きっと淋しくなると思う。」

(11) 現在の様子

保育園通園二年目の六十二年五月に、母親からH児の現在の様子を聞いた。

「入園してまもなくから言葉数が非常に増え現在では話すことは殆ど問題がない。けれども手指の使いかたがやや不器用であったり、少し落ち着きがないということで、半年に一回巡回相談を受けている。」

「友達ができるのが早かったと保母から言われた。この頃は通園も友達と行くと言い始めた。保育園が楽しくなっているようだ。父が帰宅するのを待って、その日のことを一生懸命話している。」

「遊びの会」参加時の問題は、殆ど解消しているようだ。母親自身も父母会を通して友人ができ、行き来も始まったという。

四 考察

「遊びの会」参加以前、H児と母親の間には愛着関係がしっかりと成立しておらず、子どもの側には発話が乏しい、落ち着きがないといった問題があり、母親の側にもうまく相手をして遊べないという悩みがあったため、楽

しく心暖かな交流の機会が少なかったのではないか。何とかしなくてはという気持ちと、私が働きかけても変わりはしないだろうというアンビバレンツな感情と不安があったのではないだろうか。また、母親自身も転居後、隣家の義母とのつきあいや新しい地での友達作りなどに困難を感じ、十分にH児の気持ちをくみ取る余裕がなかったようにも考えられる。

参加当初、母親はH児の行動の多くを『困ったこと』としてとらえることがよく見うけられた。例えば、他児に迷惑をかける・汚れる・言うことをきかない・呼んでもこないというようなことである。そうした一方的な視点が、同齢のグループ活動の中で、他の子の同じような行動に気付いたり、他の母親と話したり、保育者の関わり方を見たりする中で変化し、H児の楽しさを少しずつ共有できるようになったのではないだろうか。また、保育者との話し合いを手掛りに、H児の行動の文脈の意味するところを次第にくみ取ることができるようになったことで、余裕を持った関わりができるようになっていったと考えられた。

言葉が増えた・他児との交流が増えたというH児の変化が、母親にH児に対して肯定的な感情を抱かせ、過去に流産の経験があるがもう一人子どもが欲しいという気持ちを持たせていったのではないだろうか。そして流産という出来事を乗り越えて、H児の成長を認識し、しっかりとした母子間の愛着を形成していったと考えられた。

人と親しくなりにくいと自ら言う母親ではあったが、母子分離せず一緒に遊ぶ・母―子―保育者の三者関係を核として活動するという「遊びの会」のシステムの中で、他児と交流する新たなH児の姿に気付き、保育者の関わり方を参考にし、他の母親と気持ちを分かち合うことで、H児とのゆとりある関係と愛着が生まれてきたように思う。本事例の場合、母子一緒の集団遊びグループという「遊びの会」のシステムが有効であったと考えた。

引用文献

(1) 練馬区保健所保健婦研究会『ねりまの子の幸せをねがって』一九八四年

(2) 尾関夢子・三宅篤子編著『乳幼児のための健康診断』青木書店、一九八五年、p.217〜8

関連研究発表

第30回日本小児保健学会　一九八三年
『一歳六ヵ月児健診の経過観察に遊び指導を導入する試み』
（上垣内　伸子・山崎　聡子　お茶の水女子大学）

第33回日本小児保健学会　一九八六年
『幼児期前期に多動傾向を示した子供の発達像に関する研究』
（古屋　喜美代・市川　奈緒子　東京大学）

幼児の教育　第八十六巻　第十号
十月号　©
定価　四〇〇円
昭和六十二年九月二十五日　印刷
昭和六十二年十月　一　日　発行
編集兼発行人　本　田　和　子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九一九六四〇番
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

組み合わせ自由。夢は無限に広がります。

スペースにマッチ。予算にマッチ。
子供の　気持にぴったりマッチ。

セット例（Bセット）　合計507,000円

スペースに合わせた図書コーナー

●幼児教育に実績をもつフレーベル館が開発した図書室システムは、現在あるスペースに合わせられる、システムファニチュアです。組み合わせは自由自在、単品でも使えます。保育室の図書コーナーから図書室の総合レイアウトまで、お好きな形でご利用いただけます。もちろんレイアウトの変更も思いのままです。書架とイス、テーブル、ソファ、マットなど必要な数だけをセットするわけですから、費用の点でも無駄がありません。

19種類の中からスペース・ご予算に合わせてお選びください。

システム書架・直線/システム書架・曲線/システム書架・コーナー/システム書架・台形/書架ワゴン/ソファーマット・A/ソファーマット・B/ソファーマット・六角/L型ベンチ・大/L型ベンチ・小/テーブル/書架ベンチ/書架/アンパンマン書架/大型回転マガジンラック/1連書架・窓下傾斜/2連書架・窓下傾斜/1連書架・傾斜/2連書架・傾斜

フレーベル館が選んだバラエティ豊かな本のラインアップ

学校図書館選定図書を中心に幼児に適した本も、フレーベル館で一括して購入できます。
ぜひご利用下さい。

くわしくは、担当営業マンにご相談ください。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

のびのび自由に、活発に。元気な子どもの室内遊具。

キンダートリムランド®

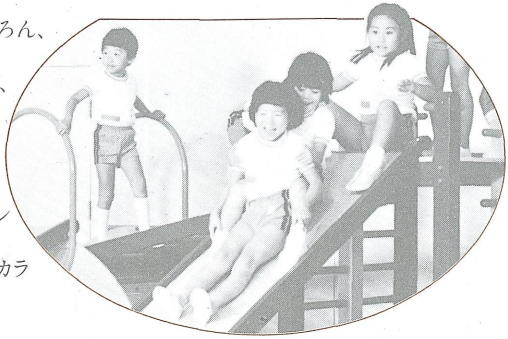
遊びの工夫がいっぱい。子どもの心とからだを育むシステム遊具。

単体での遊びから、コンビネーションやサーキットレイアウトなど多彩なバリエーションが可能なシステム遊具です。

〈実用新案・意匠登録出願中〉

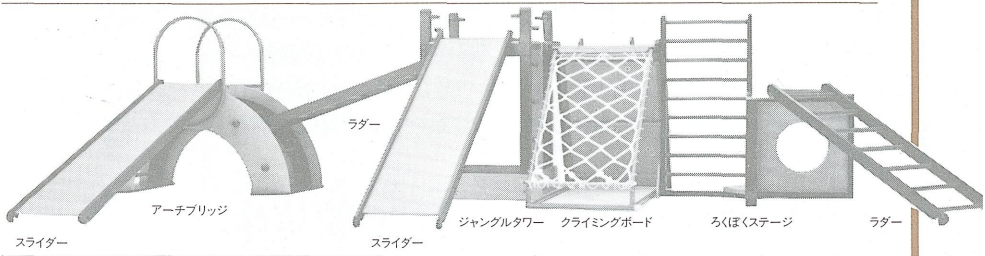
■特長

- それぞれの遊具は単体で遊ぶことはもちろん、スライダー（すべり台）やラダー（はしご）を連結したり、別のセットと組み合わせたりして、多様な展開が可能です。
- スペースやご予算に応じた購入ができます。各年度ごとにパーツを追加していく計画購入もできます。
- 耐久性と安全性に十分配慮したデザイン設計です。
- 室内に明るくマッチする、いきいきと楽しいカラーとデザインです。



■生産物賠償責任保険付

総合セットコンビネーション例



総合セット 3025-10 ¥750,000

ジャングルタワー、ろくぼくステージ、アーチブリッジ、クライミングボード 各1、スライダー、ラダー 各2

ジャングルタワー	ろくぼくステージ	アーチブリッジ	クライミングボード	スライダー
3025-01 ¥170,000	3025-02 ¥150,000	3025-03 ¥170,000	3025-04 ¥150,000	3025-05 ¥37,000
●木製　ポリウレタン塗装 ●縦110×横110×高さ145cm	●木製　ポリウレタン塗装 ●縦120×横120×高さ143cm	●木製　ポリウレタン塗装 スチールパイプ 焼付塗装 ●縦90×横180×高さ150cm	●木製　ポリウレタン塗装、スチールパイプ　焼付塗装、ビニロンネット ●縦93×横177×高さ125cm	ラダー 3025-06 ¥23,000

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館